異世界から来た狩人

数和辞典

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界から来た狩人

【Ｎコード】
Ｎ９４１７Ｍ

【作者名】
数和辞典

【あらすじ】
崩竜を倒し、ポッケ村を救った“ハンター”。彼はまだ見ぬモンスターを求め、次なる拠点「メゼポルタ」へと向かう……はずだったのだが、何の因果か異世界へ迷い込んでしまう。そこは剣と魔法の世界。襲い掛かるはまったく未知のモンスター。ポッケ村の英雄は、この世界で何を為すのか。狩人の新たなる物語が、いま、動き出す。

プロローグ（前書き）

初投稿にして初作品です。
なるべく分かりやすく、を心がけて書いていきたいです。
拙く、一部一部が短い小説になると思いますが、お付き合いくだされば幸いです。
どうぞよろしくお願いします。

なお、ある程度の予備知識がないと理解できない場所がありますが、そこはＧｏｏｇｌｅ先生などに訊きながら読み進めていただければと思います。

実は完全に見切り発車なんだぜ…これ。

プロローグ

――モンスターハンターという職業がある。

普通の人間にはとてもじゃないが対処できない、“モンスター”と呼ばれる生き物との戦いを生業とする狩人（ハンター）たち。

俺もその中の一人だ。

そして、自慢じゃないがこの世界じゃ結構有名なハンターだったりする。

ポッケ村、という名の雪山の中の小さな村、俺はその村の専属ハンターとして働いていた。

着任した当時は駆け出しだった俺だが、その村で次々と依頼をこなしていくうちに、いつしかハンターズギルドからも一目置かれる狩人となっていた。

山ほどの大きさを持つ龍やら、その頭骨を背負ったでかい蟹やら、そんな化け物を討伐しろという国からの依頼にも幾度か参加したこともある。

“G級”ハンターとして認められてからは、より危険な地域へと赴き、強大な力を持ったモンスターと戦った。

…で、二年ほど前のことだ。崩竜と呼ばれるどでかいモンスター

が村の近くに現れた。

世話になっている村のみんなの為にと、俺は単身その化け物（ウカムルバス）に挑み、まあ、メチャクチャ大変だったんだが…なんとか討伐することができた。

今までほとんど姿を見せず、生態も分からなかったモンスターと一人で戦い、それを討伐したという武勇伝で、俺の名前は一躍有名になった。

それからは村に「俺の弟子になりたい！」…なんて言ってくる若手のハンターが何人もやってくるわ、とてもじゃないが村からじゃ向かえないような所から依頼が舞い込むわ、とにかく慌ただしかった。

受けられない依頼はどうしようもないとしても、弟子希望っては素直にうれしかったから、希望者の中から何人かを選び、この二年間は彼らを成長させることに力を注いだ。

……訓練所の教官が何かを言いたそうにこちらを見ていたのは無視し続けた。

今思えば、このときにはもう自分のこれからをどうするか、決めていたんだっけ。

――　一週間ほど前に、俺は慣れ親しんだポッケ村から旅立った。

もう俺がいなくても、この村はやっていける。そう確信したからだ。

あの辺りにはすでに特別危険なモンスターは存在しないし、よしんば現れたとしても、俺の弟子たちが村を守る。あいつらならそうそう負けたりはしないだろう。

俺が使っていた武器や防具もほとんどを弟子に譲ってやった。手元に残したのはいちばん愛用していた一振りの太刀と防具一式。新しいスタートを切る、という意味も含んでのことだった。

旅立つ、と村のみんなに伝えたときには、寂しそうな顔をしてくれたが、誰も止めはしなかった。…とてもありがたかった。引き止められていれば俺は残っていたかもしれない。

本当に名残惜しいけど、俺も新しい一歩を踏み出したいんだ。

「ヌシには未来がある。こんな小さな村で一生を終えるような男ではない」

村長はこう言って俺を送り出した。

そう、俺はもっと見たかったんだ。この世界を。まだ見ぬモンスター達を。自分の力がどこまで通用するのかを。もっとずっと先を。

――とまあ、そんなことを回想しながら俺は街道をすすんでいる。

目指しているのはメゼポルタ、という所だ。最近になって、そこに世界中から腕自慢のハンターが集まってきているとか。

ポッケ村からはポポ車、アプトノス車を乗り継いで六日と、徒歩で三日。つくづくポッケ村は田舎だったんだと思った。いいところだから文句は無いけど。

車に乗り合わせた商人にメゼポルタについての話を聞いてみると、「こいつ田舎者だ」という目を向けられた。ムッとはしたものの、いろいろと詳しく教えてくれたから、まあいいや。

新たに発見されたモンスターの噂も聞いた。エスピナスとかいう竜や、アクラ……なんちゃらとかいうよく分からん奴もいるらしい。

ハンターとしては、ぜひ一度ぶつかってみたいところだ。

……これらは先日の話。すでに車の旅は終わり、徒歩の旅となっている。

メゼポルタへの道をがちゃがちゃと防具の音を響かせつつ、これから自分を待っている未来を想像し、ニヤニヤと笑いながら歩いている俺。

傍から見たらかなりアブナイのかもしれないが、どうにも自分の興奮を抑えられそうに無いし、そもそも頭防具でこのニヤケ顔なんぞ見えやしない、とすでに開き直っている。

「待ってろよ、化け物ども！　いまぶちのめしてやるからなぁ～！！」

そう叫んで、俺は意気揚々と走り出す。…叫ぶ前に辺りに人がいないのを確認したのはご愛嬌。聞かれてたら恥ずかしいだろ？

新たなる始まりの地、メゼポルタまであと二日。

……

……

…

……のはずだったんだけどなぁ。

「おい、どこだよ、ここ…」

気づけば俺は、見渡す限りの砂漠に囲まれていた。

プロローグ（後書き）

主人公の装備なんかは次話で明らかにする予定です。

ぶっちゃけポッケとメゼポルタの距離は適当です。

ちなみに自分はＭＨＦプレイヤーではないので、Ｆの知識はほとんどありません。

ＭＨＰ２Ｇの延長線上の物語だと考えてください。

第1話　強者と砂漠と（前書き）

前回よりだいぶ長い文章ですが、その分推敲があまくなりがちなんだよなぁ。
それでもめげずにがんばって行きたいと思います。

昨日の今日の投稿となりますが、不定期更新です。なるべくがんばるけどね。

第1話　強者と砂漠と

「おい、どこだよ、ここ…」

目をひらいて最初に見えたのは青空。あれ、何で俺こんなところで寝てるの？

そのままぐるりと首を回すと、３６０度砂、砂、砂。大パノラマで砂丘が広がっている。

何故だかはわからないが、どうやら俺はこの大砂漠のど真ん中に倒れているらしい。

真正面、つまり空を改めて見れば、でっかい太陽がこんにちは。日光でじりじりと防具の表面を焼いている。

日向ぼっこ、きもちいいなぁ…ってんなわけあるか。

ああ、くそ。頭がボーッとしてる。砂漠の暑さのせいか？炎天下だっていうのに、どれだけ寝てたんだよ俺は…

…とりあえず体を起こそう。そう思って体に力を入れる。

「…っ！　ぐっ、っ痛つつつ」

あれ？　何で体がこんなに痛いんだ？　まるで攻撃を食らったみたい――

「…ああ！？」

その瞬間、ぼやけていた頭が急にクリアになった。

「いや待て！　なんでだ？　おかしいだろ！？　何で砂漠なんかにいるんだ俺は！！」

俺は痛みも忘れて立ち上がり、すぐに辺りを警戒する。頭はパニック寸前だが、そうも言っていられない。俺に怪我をさせた“アイツ”がまだ近くにいるかもしれないからだ。

既に右手は背中の得物にかかっている。大丈夫だ、何があっても対応できる。

どこだ…　どこにいる…　“轟竜（ティガレックス）”……

「…居ない、か？」

どうにも腑に落ちないが、俺はそう結論付けた。何度辺りを見回しても、何の影も見当たらない。意識を集中させ、気配を探るも反応なし。普段ならどこかに隠れていることも考えるのだが、ここは辺り一面砂だらけの砂漠。あの巨体が隠れられる場所はない。

ティガレックス以外のモンスターが地面にもぐっている可能性もある。ポーチから音爆弾をいくつか取り出し、投げてみた。音に敏感な奴らが潜っていればこれで飛び出してくるのだが、これにも無反応。

一応、砂漠でよく見かけられる魚竜どもの姿も探してみたが、奴ら特有の背びれは確認できなかった。

とりあえず安全、と砂の上に腰を下ろす。

「だけど、なんで砂漠？　まさか、アイツにここまで吹っ飛ばされたってのか？」

いやいやいやいやありえない。そんなタックル食らったら怪我なんぞじゃ済まん。死んじまうだろ――って。

ん？　あれ？　もしかして俺、死んだ？　ここは天国…？　いや地獄…？

「…待て、待て待て待て待て。落ち着くんだ」

どんな時も決してあわてない。冷静に判断し、対処し、活路を開く。…ハンターの鉄則だ。

「とりあえずは怪我の治療と、この熱さをどうにかしなきゃな」

防具の止め具を緩め、少し風通しをよくする。ふぃー。これだけでだいぶ違うな～。

頭防具も外してしまうかどうか正直悩んだが、安全と判断した自分を信じて、外す。もしこの瞬間を襲われて死ぬのならば、俺はその程度のハンターだったって事だ。

…まあ、もちろん防具はすぐに付け直せるように訓練してきているんだけどな。

いまのところまだ生きている俺は、ポーチから2種類の飲料を取り出す。回復薬とクーラードリンク、どちらもハンターの必需品だ。俺は常にこれらの薬を携帯している。備えあれば～ってやつだ。

「んぐんぐんぐ…っぷはぁ」

両方とも一気に飲んでしまう。どちらも即効性だ。傷口は既に治り始めているし、熱さも感じない。

…俺はこういうアイテムの原理は知らないが、作った奴はすごいだと思う。

「んじゃま、と。…なんで俺はここにいる？」

一息ついた俺は、クーラードリンクで冷やされて冴えた頭で考えてみる。

「俺はメゼポルタに向かう途中だった。で、あとは山を一つ越えれば到着するはずで…そんでもって昨日山に入った、と。よし、ここまではいいな」

そうだ、俺は山にいたはずなんだ。しかもどっちかっていうと森といえる山で、断じて砂漠の中にそびえている山じゃあ無い。道は整備されていなかったが、あのていどの悪路なんぞ俺にとっては苦にならない。

何も無ければ翌日には山をくだって、晴れてメゼポルタにご案内

～…の予定だった。

「…そうなんだよな、何も無ければよかったんだよな、うん」

だが、どうやら俺には新しい拠点に行く途中で“ヤツ”に出くわす運命、のようなものがあるらしい。

轟竜、ティガレックス。

比較的最近になって見かけられるようになった飛竜で、まだその生態も明らかになっていない。黄色を基調とした体皮をもち、その鋭い牙や爪、そして強靭な筋肉を生かした体全体を使っての攻撃は凄まじい。おまけに性格は他に類を見ないほど獰猛で、お前戦うために生まれてきたの？と思ってしまうようなモンスターである。

俺が初めて出会ったのは、駆け出しの頃だ。ポッケ村に向かう途中に襲われ、崖の上から突き落とされた。その後しばらくして討伐に向かい、倒したときには、“俺、強くなったなぁ”って実感したっけな。

まあ、そんなことはどうでもいいんだ。

山道も中盤、そろそろ下山ルートかなってときにそいつは現れた。おそらく山の獲物を獲るためにちょっと遠くまで～ということだったんだろうが、俺には関係ない。思わず、「またお前かっ！」ってツッこんだ気がする。それぐらい俺にも余裕があったってことだろう。

実際戦ってみたが、どうも“上位”級の轟竜じゃないかと感じた。なんというか、同じ種類のモンスターでも、そのレベルによって重

圧が違うんだ。もちろん体感だから、断言はできないが。

とにかく、G級ハンターの俺が上位級のモンスターに遅れをとるわけにはいかない。俺は奴の攻撃をひらりひらりかわしつつ、何度も自慢の愛刀を振った。向こうも俺のほうが上だとはわかったんだろうが、ティガレックスは絶対に引かない、ということで有名だ。ズタボロになっても攻撃を続けるその姿に、コイツはやっぱり俺のライバルだ、ということを再確認した。

前足への斬撃で奴が一瞬ひるみ、大きな隙が生まれた。俺はすかさず、奴の頭めがけて太刀を突き出す。とっさに頭を引こうとしたようだが、俺のほうが早い！愛刀の切っ先は奴の左目に突き刺さった。悲鳴を上げてのけぞる轟竜。本当は眉間に突き刺して息の根を止めるつもりだったんだがな。流石だよ。

だがもはや勝敗は決したようなものだ。いまだに片眼を失った痛みでもがいている奴に止めを刺そうと、俺は大きく一歩踏み出した。

――油断があったとは思わない。

突然、轟竜に残された右眼が俺にまっすぐ向いた。ああいう眼を俺は知っている。死の覚悟を持って反撃に出ようとする生き物の眼だった。「まずいっ！」とは思ったがもう遅い。既に上段からの斬撃のモーションにはいっている俺に、轟竜が飛び掛ってくる。俺はとっさに太刀を振り下ろすが、これでは止めと成り得ないのは自分が一番よく分かっていた。それでも俺の愛刀はティガレックスの右肩から左の脇腹までを傷つける。だが、奴は止まらない。

ティガレックスの体が俺に覆いかぶさってくる。当然だが、人間の体ではとてもじゃないがモンスターの重量を支えられない。おま

けに飛び掛ってくる勢いがその重量に加算されるのだ。俺はなすすべもなく吹き飛ばされた。飛び掛ってきた轟竜もろともに。

向こうも攻撃した後の事なんか考えちゃいなかったんだろう。そのくらいの捨て身だった。勢いを殺しきれず、俺を巻き込んでごろごろと転がり続けている。奴の体が邪魔で周りの様子は見えなかったが、バキッ、メキッと山の木が折れる音は聞こえてくる。こうなってしまっては、俺にできることは少しでも衝撃を和らげるようにすることだけだ。いずれどこかの木にぶつかって止まるだろう、俺はそう考えていた。…考えていたんだ。

ふいに、破壊音が消えた。なんかしずかになったな、と思った次の瞬間、俺を襲ったのは浮遊感。さすがに軽くパニクったね。スッと轟竜の体が俺から離れ、視界がクリアになった。見えるのは大空。離れていく森。露出した岩肌。ああ、つまり俺は――

ものすごい衝撃を感じたところで俺の記憶は途絶えている。

これが、俺の怪我の原因だ。轟竜の体当たりと、その後の崖からの転落。よく生きてたな、俺。だがしかし、これは現在のもっとも大きな異常については何も説明できていない。百万歩譲ってあの崖の下が砂漠だったとしてもだ、俺とともに落ちたはずのティガレックスも、そもそもの落ちた崖すら見当たらない。

一番有力な線は“誰かが運んだ”、というものだが、何のためなのかさっぱりわからん。

正直な話、途方にくれている。

「…しかたない。とりあえず、移動するか」

……

……

…

俺は今、太陽で方角を確認しつつ、砂漠を北へ向かって歩いている。

いや、方位磁石は当然持ってきてたんだが、ここではクルクル回って使い物にならない。こんなことは初めてだ。鉱物資源が豊富なところは磁石が狂うと聞いたことがあるが、ここは見渡す限り砂漠だぞ？地下にでも埋まっているのか？

「ちくしょお～　なんで誰もいないんだよぉ～」

俺が北に歩いているのにも理由がある。

世界には大きな砂漠が２つ。セクメーア砂漠とデデ砂漠だ。俺はおそらくその２つのどちらかにいるのだろうが、どちらでも北に向かうことで、レクサーラというオアシス村に行き着く。俺も砂漠に狩りに行く際には、そこを拠点として行動していた。無論、東か西によりすぎていてたどり着けないなんてこともあるかもしれないが、それでもどこかで行商人や他のハンターに会えるだろう。

――そう楽観してたんだけど、ちょっとまずいかもしんない。

「あああーっ！　そもそも何も無さ過ぎるだろこの砂漠！！　なんでモンスターすら出ないんだよ！」

ごめん、ちょっと焦ってるんだ俺。

歩き続けて既に3時間以上。クーラードリンクは既に底を尽き、今効いている分がなくなれば終わりだ。さらには生き物に出会えないので、肉焼きセットはただの荷物と化していた。つまり、おなかが空いてるんだよ。

「これ、ちょっと洒落になってないかもな…」

俺はひたすら歩き続ける。オアシスを求めて。

……

…

あれからさらに3時間。俺は既に限界に達しようとしていた。

クーラードリンクの効果は2時間も前に切れている。それでも暑さは何とか我慢しているが、喉の渇きが尋常じゃない。持っていた水はとっくの昔に無くなっていたので、回復薬が飲み物と化していた。

俺はよほど砂漠の奥地に運ばれていたらしいな。どこの物好きだよ、俺をこんな目にあわせるなんて。誰かの恨みを買った覚えは無いんだけどなぁ…。

「砂、すな、スナ、ｓｕｎａ…」

俺の目の前には砂ばかり。たまに見かける枯れた植物がものすごく新鮮に思える。あまりの空腹に一度その植物を食べてみたんだが、ものすごい辛さだった。トウガラシより辛い物なんてあったのかよ…。逆にメチャクチャ甘いものもあった。思わず吐きそうになった…。両方とも一応採取しておく。

ところどころで黒い石を見つけたこともある。もしかして、と思って方位磁石を近づけてみると、案の定強く引き付けられていた。暇つぶしにいろいろやってみてわかったが、この石は砥石より硬く、鉄鉱石より軽い。とりあえず見つけた分は採取しておいた。

「でも、これを加工する前に俺が死んじまう可能性もあるよなぁ…」

自分の未来を考えて欝になる。つい先日まで、輝かしいハンターライフを夢に描いていたのに、俺はこんなところで何をしてるんだ…。

ポッケ村に帰りたいな、と望郷の念が頭に浮かんだ、その時だった。

――今のはなんだ？　見間違いか？

俺のハンターとして鍛えられた眼に、何かが動くのが見えた気がした。全力で意識を集中させ、眼を凝らす。

「間違いない、何か動いてるぞ！」

俺は疲れも忘れて全力でダッシュする。人でもモンスターでもかまうもんか。人なら食わせてもらえる！　モンスターなら食える！　どちらかなら人がいいけどな！

うおおおおっと近づいていけば、もう目を凝らさなくても動いているのが確認できるようになった。どうもモンスターらしいな。地中を移動しているようで、動いて見えたのは巻き上がった砂だったようだ。ガレオスか？　それともモノブロス、ディアブロスか！？　人でないのは残念だが、食い物になるならいいや！　俺のハンター生命で、飛竜を食い物としてみたのはこれが初めてだった。

モンスターはもうすぐそこまで迫っている。あらん限りの声で俺は叫ぶ！

「でてこいや俺の食料ぉぉおおお！！」

その瞬間、俺の声に応えるがごとく、モンスターが地中から飛び出してきた！

「……え？」

――俺の命をつなぐために現れたソイツは、体長１０ｍはあろうかという、食欲をすっかり失ってしまうような醜悪な外見をした芋虫（ワーム）だった……

第1話　強者と砂漠と（後書き）

しゅ、主人公の装備は次話で（ｒｙ

戦闘シーンを軽く書いてみましたが、やっぱり難しい。
あくまで主人公の説明の一部ということなので、なるべく長くないようにとは思いました。
次回は戦闘メインになるかなー。

あと、いまさらですがこの異世界はオリジナルの世界です。他の作品とかぶってしまう設定はたくさん出てくると思いますが、意図して真似ようとする気は一切ありません。と、今のうちに言い訳しておきます。

第2話　熱砂に潜む魔物（前書き）

2話目になります。半分ぐらい戦闘シーン…なんだけど、なんか自分で読んでると短く思えるんですよね。
長さは前回と同じくらいです。俺にはこれが限界…

第2話　熱砂に潜む魔物

「…え？」

何だコイツは！？俺の前に現れたのは、今まで見たことの無いモンスター。見た目についての率直な感想としては「気持ち悪っ！」の一言に尽きる。

体色はゲネポスに似た色だ。ツチハチノコをイメージさせるような胴体に、フルフルの開いた口を思わせるような頭を持ったソイツは、シュー、シューと鳴き声のような音を出しながら俺を睨み付けている。とはいえ、目があるのかどうかは定かじゃないが。

あれか、コイツが噂のアクラなんとかか！　砂漠に出るという話は聞いていたから、可能性はあるな。チッ、できればもう少し情報を集めてから接触したかった。どこをどう剥ぎ取ればいいのかわからないだろうがっ！

だが、いま最も重要なのは――

「こいつ…食えるのかな…？」

この一点に尽きるな、うん。ハンターとして幾度もサバイバルも経験し、一般の人間が食べないようなもの、つまりゲテモノをさんざん食ってきた俺だが、こんなにでかい芋虫は流石に見たことも味わったこともない。

…けど、背に腹はかえられんよなぁ。食わにゃあ俺が死ぬ。

「まあ、まずはコイツを狩らなきゃはじまらないよな」

俺は意識を切り替える。空腹や暑さのことは心の引き出しへしまいこみ、代わりに取り出すのは生粋のハンターとしての魂だ。五感が冴えわたり、モンスター(あの芋虫)を狩るために必要な情報を手に入れることに特化する。

俺の内面の変化に気づいているのかいないのか、芋虫は動こうとしない。依然として頭を俺のほうに向けたままだ。様子をうかがっているってとこか。

まず、頭と思われる部位だが、一見して目として機能していそうな器官は見当たらない。閃光玉は効かないと判断していいだろう。あの口はヤバそうだな…ポポの子供程度なら丸呑みできそうだ。当然俺は言うに及ばず。

次に胴体を観察する。芋虫らしくでこぼこした体を持っているが、もう少し注意深く見てみると、カラカラに乾燥した地面のような体皮をしている。どうやら見た目どおりのブヨブヨではないらしい。

地面に潜っていたことから、音爆弾が効きそうだが…やってみなくちゃ分からん。

――まあ、こんなところか。実際にどんなモンスターなのかは、それこそぶち当たってみればすぐに分かる。

俺の体は既に臨戦態勢だ。傍からは無防備のように見える、と知り合いのハンターに言われたが、これが長年の経験で編み出した俺のスタイルだ。奴が何をしてこようが対処できる。

「さぁて、食うか食われるかだ。　…来いよ芋虫！！」

言葉と同時に俺は大きく片足を引いた。“ザッ”っと大きな足音がする。

…狩猟（クエスト）開始だ！

＊　＊　＊

俺の足音を聞き取ったのだろう、瞬間、芋虫が大きく口を開け、頭から俺のほうに突っ込んでくる！　まるでフルフルの捕食だな。丸呑みにされてしまえば一巻の終わりだ。

「ハッ！　単純なんだよっ！」

が、攻撃を誘ったのは俺のほう。慌てず引いたほうの足に力を込め、横に飛び込み前転、回避する。

目標を失った奴は、その勢いのまま砂に頭を突っ込んだ。大きく砂煙が上がり、その巨体が見えなくなる。ここまでは計算どおりだが、ここからは奴の動きを見極め、行動しなければならない。

体勢を立て直した俺は、すぐさま次の行動に出た。アイツがいると思われる場所を見据えながら、砂煙を中心に円を描くように走る。これにもちゃんとした理由が――っと、案の定だな。

薄れた砂煙の中からは、本来そこにいるはずの芋虫の姿が無くなっていた。おそらく、攻撃が失敗したことがわかると同時に、地中に潜ったんだろう。ブロスどもがよく使う手だ。

たぶん奴は次の行動として、俺の真下から飛び出しての捕食を狙っているはずだ。これもあの飛竜の十八番だ。今頃地中で足音を頼りに俺の位置を把握しようとしているんだろうが、俺は常に移動しているのだ。そう簡単に足下には来られまい。

折角だ、奴の習性を確認しておこう。

俺は走りながらポーチに手を伸ばし、その中から音爆弾を取り出す。コイツはモンスターの器官の一つである“鳴き袋”に爆薬を詰めたものだ。破裂させることでかなり大きな音を出す。耳の良いモンスターには極めて有効な道具だ。これでアイツの聴力をはかってみる。

「くらえっ！」

ギィィイイン　と、ものすごい音が砂漠に響く！　初めて使ったとき、そのあまりの音の大きさに自分の耳がイカレたっけな。…さぁ、奴のほうはどんな反応を示す？

――ザバァッ！

よしっ、出てきた！　位置は投げた音爆弾の破裂した場所とほぼ同じだ。だが苦しんでいる様子は無い。驚いて出てきてしまっただけのようだ。その証拠に頭をきょろきょろとめぐらせている。何が起こったのかわからないんだろうな。…ちょっと可愛いと思ってし

まったのは秘密。

だが、それは致命的な隙だ。俺は全力で奴に肉薄する。右手は既に背中の愛刀の柄へ。距離は残り数メートルだ。

芋虫が俺の方を向いた。飛び掛かるための予備動作として、体をのけぞらせているが、もう遅い！！

「うおおおおおっ！」

太刀が鞘から抜き放たれた。俺はそのまま右上から斜めに切り下ろす！　美しい銀色の刀身が、モンスターの胴体を袈裟懸けに切り裂いていく。

―ギィィィイイイイイ！！―

初めて聞く奴の悲鳴。紫色をした体液を撒き散らしながら、芋虫は必死に身をよじり、致命傷を避けようとする。だが、俺の“攻撃”は斬撃だけでは終わらない。

ゴォォオオッ！！

刀身から噴出すのは凄まじい熱量を誇る炎。鉄をも容易に溶かしきるそれを生み出しているのは、複雑な生産過程の中で仕込まれた、火竜リオレウスの強大な力が宿る“業炎袋”だ。

俺の愛刀、“飛竜刀―椿―”は、世にも珍しい銀色のリオレウスの貴重な素材をふんだんに使った最高クラスの太刀。俺はこの武器で、数多くのモンスターを文字通り“焼き斬って”きた。

傷口を焼かれるのがどれだけの苦痛なのか、俺は知らない。だが、たった今その痛みを与えられているソイツは、その身を痙攣させているだけとなっていた。…いま楽にしてやるよ。

芋虫の胴体を切り裂きながら左下へと抜けた刀身を返し、今度は左から横一直線に――

「…じゃあな」

――ぶった切る！！

振りぬいた飛竜刀の刃が、太陽の光を受けて輝いていた。

もう悲鳴も上げられなかったんだろう。痙攣も止まり、硬直したヤツが、ゆっくりと崩れ落ちる。

…ドシャッ！

互いの身を賭けた俺とこの巨大芋虫との遭遇戦は、俺の勝利で幕を閉じた。

……

……

…

倒れた“ソレ”の体から大量の体液が流れ出ては、砂漠の大地に吸収されていく。

それを横目に俺がしているのは、勝者の権利、“剥ぎ取り”だ。長年愛用してきたハンターナイフで、ザクッ、グシャッと音を立てながら、今回の獲物である芋虫の死骸を解体していく。

「うーん、体皮は虫にしちゃあ結構な強度だな。カンタロスよりも硬いか。まあ、飛竜とは比べ物にならないけど。…お、この頭のとこの穴が耳かな？　…牙はまずまずの物じゃないか。これはいいボウガンの弾になるぞー」

いやー、いつもの事だが、初めて狩ったモンスターの剥ぎ取りっていうのは心が躍るね。しかも今回は予備知識が一切無いから、自分で選別しなきゃならない。となれば、やる気も普段より出るってもんだ！

「…ただ、こいつの肉は、食いたくないなぁ」

苦笑しながらも、体液と同じように紫がかった肉を除けて、奥へ奥へと進む。…ん？　これが胃か？

「あれ？　これは…」

コイツの生態を少しでも知ろうと胃の中を確認してみたのだが、その中にはここに来るまでにいくつか拾っていたあの黒い石が2，3個入っているだけだった。

ここに来るまでにもいろいろと研究してみたそれを、改めて検分してみる。

「やっぱり、鉱石だよな？　こいつらはこれを食って生きてるのか？」

鉱石を体に取り込んで生きているモンスターも居ないわけではないが、コイツの種もそんな奴らの仲間なのだろうか？　謎は深まるばかり、ってか。

「まあ、こいつの正体も何もかも、レクサーラにいけばわかるだろ。よし、しかたない。本当に仕方ないが…腹ごしらえだ」

ああっ！　モスの、アプトノスの肉が食いたいっ！　と心の中で嘆きつつ、芋虫の死体へ向き直った。

その時だ。

俺の感が告げる。

―危険だ、いますぐそこを離れろ！―

とっさに体のバネをフルに使い、前転する。より遠くへと跳ぶように。

――ザバァッ！！

俺がたった今まで立っていた場所に立ちこめる砂煙。わずかに見える影は、さっきまでの相手と違わぬ物だ。

「くそっ！　もう1匹――」

――ザバァッ！　ザバァッ！！

「……マジかよ」

一瞬にして3匹の芋虫に囲まれた俺。示し合わせてでもいたのか、俺を囲むように現れやがった。

シュー、シューと耳障りな音が3重となって聞こえてくる。心なしか怒りを含んでいるように感じた。いや、きっとそうなのだろう。俺の後ろには奴らの仲間だったモノが1匹転がってるんだから。

ゆっくりと右手を『椿』の柄へと持っていく。…どうやら昼食はさらに遅く摂ることになりそうだ。

「食い物の恨みは恐ろしいんだぞテメェラァァァ！！」

今日一日の“不運”への怒りを込めた一声と同時に、俺の第2ラウンドが始まった。

……

……

…

「ハァッ、ハァッ、ハァッ、ハァッ…」

…結論から言おう。３匹なんてもんじゃなかった。

２匹殺したと思ったらいつの間にか４匹になってた。

３匹目を殺したら、５匹になってた。…そこからはもう数えるのをやめた。１０は殺したんじゃないか？

奴らの防御力の低さが唯一の救いだった。１度か２度胴体を斬りつけてやれば殺せるんだ。飛竜との戦いに比べれば楽なもんさ。

だが、俺の体は久しぶりに限界を超えてしまったようだ。

まあ、そりゃそうだろう。砂漠を食わず冷やさずで６時間歩き、そのまま休みなしで得体の知れないモンスターとの連戦につぐ連戦をこなしたんだ。流石に動けん。

剥ぎ取りをする気力も無く、俺は砂の上に大の字に倒れている。

すでに太陽は地平線に潜り始めている。おかげで砂漠は涼しくはなってきているが、沈みきってしまえばすぐに凍りつくような寒さとなるだろう。

「…畜生、俺もここまでか」

ハンターとして、死ぬならばモンスターとの戦いで、と思っていた。こんなわけのわからんことで終わるのは無念でしょうがない。

俺をここに連れてきた奴、絶対に呪い殺してやるからな。

「でもまあ、充実した人生だったし、後悔は無いな」

ポッケ村のみんなの顔が次々と現れては、消える。今までの戦いが、頭の中で再現される。

…ああ、これが走馬灯ってやつかぁ。

そんな中で現れた、一つの記憶。

…昔、一度だけ、砂漠の夕日を見たっけ。綺麗だったなぁ…。

「夕日を見ながら死ぬってのも、一興か」

軋む体を無理やりに動かして、夕陽のほうへと向ける。もう半分くらい沈んでるな…。

「凄え…綺麗――」

俺はそこで言葉を止めざるを得なかった。ありえない物を見てしまったから。

「飛竜（ワイバーン）…」

俺の薄れ行く視界に最後に映ったものは、２０体は居ようかという飛竜の大編隊だった……。

第2話　熱砂に潜む魔物（後書き）

しゅ、しゅ、主人公の防具（ｒｙ

予定通りにはいかないもんですね。書けば書くほどあれもこれも描写せにゃあ、となって本来予定していたものが書けなくなっちゃったり…精進します。

芋虫ですが、自分の中ではＦＦ５のサンドウォームとか、遊戯王のダンジョン・ワームなんかをイメージして書いてるつもりです。まあ、小説ですからお好きな姿で想像してくださいませ。

次回、オリキャラ登場！…ぶっちゃけ主人公もオリキャラみたいなもんですが。

第3話　悪魔と騎士の出会い（前書き）

3話目そぉい！
ハンターさんが如何に強いのか確認する回。

今回は主人公視点がありません。オリキャラ視点で進みます。
ちょっと書きたくてやってみたんだ。

第3話　悪魔と騎士の出会い

―Ｓｉｄｅ　？？？―

私は今、『帝国』領“ガルム砂漠”上空にいる。時刻はまもなく夕暮れにさしかかる頃だ。少し振り返って太陽を見ると、すでに美しい紅に染まり始めていた。

ガルム砂漠は偉大なる我が祖国“帝国”と、その隣国である“王国”の中間に位置している大砂漠だ。はるか昔に制定された国家間の条約の下に中央で2分割され、それぞれ帝国領、王国領と呼ばれている。だがそのあまりに過酷な環境のせいで、実際に砂漠の中央までたどり着けた人間はいないとされている。

一説には古代に栄えた巨大都市の遺跡があるとか、竜の隠した財宝があるとかいわれているが、証拠は無い。

…そろそろだな。ブリーフィングで説明のあった地域はこの辺りだったはずだ。私の数メートル前を飛んでいる隊長と副長に意識を向ける。１８頭の飛竜（ワイバーン）と、それに跨る“竜騎士”たちを統率するこの2人は、帝国軍全体で見ても屈指の実力者だ。

「隊長、まもなく作戦区域です」

「ああ。――各員、警戒を厳にせよ。すでに奴らの縄張りだ」

その言葉に、私を含めた『竜騎士部隊』の隊員達は即座に反応する。後方を飛行する“魔法”を得意とする者は、索敵用魔法の力をより高めはじめる。“竜騎槍”を持つ私のような攻撃要因は、その最終点検を。私は今までに無く念入りに、槍を確認する。これから始まる任務は、どんな些細なミスも自分の、仲間の死を招きかねないからだ。

我ら帝国軍第1竜騎士部隊は、同じ竜騎士隊の中でも精鋭中の精鋭で構成されている。隊長の意向により、他の隊とは比べものにならない厳しい選抜試験と訓練を乗り越えたものだけが所属を許されるので、コネや賄賂で入隊できる者は存在しない。

この精鋭の証である鎧に初めて袖を通したとき、なんと誇らしかったことか。

…そんな第1部隊に命じられた今回の任務は、これまで以上の危険を伴うものだった。

“砂漠の死神”と呼ばれる魔獣、『グランドワーム』の群れの殲滅、および可能であれば内1体の捕獲である。

グランドワームは、砂漠に生息する大型の魔獣である。体長は10m以上、獰猛な性格で、12～5匹の群れをなし、縄張りをはる。砂の中を移動することが可能で、その最高速度は飛竜に匹敵するといわれている。また、その皮膚は硬質で、通常の剣や槍では効果は無いに等しい。我らの竜騎槍などの魔法器や、高攻撃力の魔法をもってして初めて傷を付けることができるのである。

現時点で、地面の上でグランドワームを倒せるような部隊は、帝国にない。故に、空からの攻撃を可能とし、竜騎槍という魔法器を

備えた竜騎士隊がこの任を担当することになったのだ。

しかし、それでも我々が絶対に有利、というわけではない。

地上にいる彼らの攻撃は遥か空へと逃げれば届かないが、逆に我らが攻撃する際には、地面スレスレまでの低空飛行が必要になる。そこを狙われて命を落とした竜騎士が何人もいると、事前に説明された。

なんと恐ろしい魔獣だろうか。

グゥゥゥウウウ…

「ああ、すまない。大丈夫だ。…ありがとう、アドル」

無意識のうちに力がはいってしまったようだ。私の緊張を敏感に感じ取った相棒、アドルと名づけられた飛竜が心配そうにこちらを振り返っていたので、声をかけてあげる。やさしい子だな…。

「中尉」

「…っ！　はっ」

いつの間にか私の横に、隊長がいた。この人の飛竜の制御は帝国軍随一である。何一つ音を立てずに接近してこられたものだから気づくことができなかった。驚きが私の返事を一瞬遅らせる。

「お前は“死神”を実際に相手にするのは初めてだったな。だが、動きは“模擬戦闘”の通りで問題はない。…本当に必要なものは何か、分かるな？」

「…相手に呑まれないこと。生きることを諦めないこと、です」

考えるまでも無い。訓練の際、何度も繰り返し叩き込まれたことだからだ。

「そうだ。それさえ忘れなければ死なん」

我らが隊長、アーネスト・フォン・ヴォーネハイト中佐。『神槍』の異名を持つ帝国最強の竜騎士に、お前は死なない、と力強く告げられれば、それだけで本当に死なないような気がするから困ったものだ。しかし、私がその言葉を心から信じられる本当の理由、それは――

「なにより、俺が殺させん。可愛い愛娘を、あんな芋虫野郎にくれてやるものか」

私、シルヴィア・フォン・ヴォーネハイトが最も信頼する父の言う事だからなのだろう。

―Ｓｉｄｅ　シルヴィア　Ｅｎｄ―

＊　＊　＊

―Ｓｉｄｅ　アーネスト―

ヴォーネハイト家は代々軍人の家系だ。名を上げた者もいれば、無名のうちに死んでいった者もいるが、総じて祖国への忠義にその命をささげてきた。

俺もその例に漏れず、１６で竜騎士となって以来、２０年以上空で戦い続けた。素晴らしい妻にも出会えたし、シルヴィアという子宝にも恵まれた。いまだに男児が生まれないのは残念だが、シルヴィアは女の身でありながら、竜騎士となり、この第１竜騎士部隊への入隊も許可されたほどの傑物だ。いずれは俺に並ぶか、それ以上の騎士となって帝国の未来を背負っていくのだろう。

そういえばシルヴィアも今年で１９か。…非常に心苦しいが、そろそろ嫁の貰い手を――

―隊長っ！―

「…発見したか」

この魔法通信の主は部隊の“目”を担っている隊員の一人だ。グランドワームの姿を確認したのだろう。この通信は全員に送信されるよう設定されているので、部隊の間に緊張が走る。

―目に見える数は幾つだ。正確に報告しろ―

奴らは１つの群れにつき１２～５匹。地上に出ている数によって突入する騎士の数を決めなければならない。

―そ、それが…―

―どうした！　はっきり報告せんか！―

隣を飛行している副長のボルト・ボーマン大尉が叫ぶ。彼とは１０年来の付き合いだ。すぐに怒鳴る癖は直すべきだと言っているんだが…まあいい。次は正確な情報が――

―目標の数、１４匹！　地上に倒れています！　す、すべて死亡している模様！―

……何だと？

―繰り返します！　目標のグランドワームを１４匹確認！　すべて死亡しているものと思われます！―

「どういうことでしょう？」

ボルトが俺に聞いてくる。他の皆も動揺しているようだ。そんなこと俺が聞きたい、と言いたい所だが、いくつかの予想は立てられる。

１つは、同士討ち、縄張り争いの可能性。もう１つは、“死神”以上の力を持った魔獣が現れた可能性。…万が一後者だった場合は、撤退するべきだろう。グランドワーム１４体を殺せる魔獣など、何の対策も無しに戦えるわけが無い。

「とにかく、現場を確認しなければ始まらん。全騎、最高速度で移動せよ」

俺の命令を受け、最速で目的地に移動する竜騎士部隊。その間に、彼の“目”から新たな通信が入った。

―グランドワームの死骸の付近に、黒い鎧を着けた人間を確認！生死は不明！―

―Ｓｉｄｅ　アーネスト　Ｅｎｄ―

……

……

…

―Ｓｉｄｅ　シルヴィア―

私が目にした光景は、まるで地獄のようだった。

夕陽で紅く染まった砂の大地に地面に倒れ伏す１４の巨大な影。

この地の支配者だったはずのグランドワーム達は、皆その身体に

大きな傷を持ち、息絶えている。

一体なにを用いればあのような傷をつけられるのだろうか。

――魔法騎士の索敵で地中に生き残りがいないことを確認しつつ、我々は地上へと降りる。

敵は探知されなかったものの、油断はできない。隊長の指示の下で調査を開始する。

「おい、見ろよこいつを。あの硬い胴体が分断されてやがる」

「傷口が焼け爛れていますね…。炎系の切断攻撃魔法か、魔法器でしょうか。しかし、これほどの威力が出せるものなんて…」

ここで何があったのか。私を含め、誰もが疑問に思っている。

「おい！　誰か手伝ってくれ！！」

「くそっ、なんて重いんだこの男は！」

声の方を振り返ってみると、男性隊員2人が黒い何かを運んでいた。だが、大の男が2人がかりでも持ち上げることができないらしく、ずるずると引きずっている。

「何だ貴様らぁ！だらしのない！　中尉、少尉、一緒に来てくれ」

ボルト大尉が、私と隣にいた男性少尉に声をかける。命令ではあったものの、私も個人的な興味から走ってその場所へ向かった。

近くで見ると、改めてその異様さが分かる。

手、足がついていることから、人間だとわかる。だが纏っているその鎧は、黒を基調とし、ところどころにオレンジ色のラインが入った、身体全体を覆う重鎧。さらに、至る所に魔獣の爪の様な鋭い突起が生えている。

そして、何より目を引くのが、その背中に背負っている銀色の長剣だ。見たことの無い形状だが、それより気になるのは、まるで…そう、『生きている』様にも見えることだった。

私には、この得体の知れない人間が御伽噺の中の“悪魔”のように見えた。

「うおっ、ぬっ！　なんだこいつは！」

大尉が呻いているが、私は声を出すのも億劫だった。凄まじい重さだ。5人がかりでこの重量を感じるとはっ…。

それでもなんとか持ち上げて移動させた。下ろしたのは簡単に作られた診療台の上である。

「胸がわずかに上下しているな。まだ生きているのかも知れん。鎧を外してみてくれ」

いつの間にか隊長が我々の近くへとやってきていた。命令を受けて、皆が手分けして鎧をはずしていく。私は頭のほうに陣取っていたので、とりあえず兜に手を伸ばした。

手探りで止め具を探していくと、手ごたえを感じた。力を入れて

外す。パチン、という音がした。

慎重に兜を持ち上げていく。ズシッと重さが腕に伝わった。…なんて重さだ。どうやら重さの原因は鎧のほうにあったらしい。こんなものを着けて、動けるのか？

――やがて、素顔が現れた。

なんてことのない、青年の顔だった。年はおそらく、私より少し上、といったところか。少し拍子抜けしてしまったが…それは、私だけだったようだ。

「おいおい、どんなことをしたらこんな身体ができるんだ…」

胴体部を担当していたボルト大尉が感嘆の声をあげる。つられて私も目を向けた。

そこにあったのは、戦士としてこれ以上無い、と思えるような肉体だった。まったく無駄の無い筋肉。そして、身体の表面には無数の傷跡。いったい、この男はどんな人生を歩んできたのか。

「すみません、通してください」

皆その身体に見ほれていたようで、はっとなる。衛生兵だった。彼はすぐに診察を開始する。

「……極度の疲労が見られますね。それに脱水症状を起こしてます。あと、胃の中に何も入っていません。空腹で倒れたのかも」

言いながら、必要な魔法をかけ始める衛生兵。彼もまた精鋭の一

人である。下手な医者より腕は確かだ。

「……っ」

効果はすぐに現れた。徐々に目が開かれていく。

「○×△□※…▽×◎…」

何かぶつぶつ言っているようだが、これは…

「この辺りの言葉ではないな。…中尉」

隊長もやはり気づいたようだ。私は、言わんとすることを理解し、男の頭に手を当てる。翻訳魔法だ。手のひらから淡い光が発生する。

脳に直接かけることによって、こちらの言語を理解させる。なかなか複雑な魔法なのだが、私はそれを習得していた。…うまくいったはずだが。

男の顔を覗き込む。すでに目はしっかりと開いていた。私の目をまっすぐ見つめ返している。

「私の言っていることの意味が分かるか？」

男の目が見開いた。そして次の瞬間、そいつはニッと笑い――

「ははっ、女神も人の言葉を話すのか」

そう、つぶやいた。

第3話　悪魔と騎士の出会い（後書き）

防具の名称は入れなかったけど、これ見てくださってる方には分かるんじゃないかな？
わかんねーよって方は、もうちょっとお待ちください。おそらく次回は互いの情報交換会って感じになると思うので、そのときに。

世界観を書くのにも少し挑戦してみたけど、戦闘以上に難しいわ。
次はこういうのをもう少し詳しく書かなきゃいけないんだろうなー。
ま、オリ世界の宿命ですよね。

俺の使命は、シルヴィアをデレさせること（キリッ

第４話　On your mark（前書き）

４話そぉい！

昨日あげられなかったので若干長めに書いたぜ！…ごめん嘘です。
気がついたらこんくらいの長さになってました。

第4話　On your mark

目を開けて最初に見えたものは、鮮やかな朱色に染まった空だった。

――ああ、そういえば俺は…。

いまだぼんやりとした頭ではあったが、なんとか前後の記憶を掘り返す。

砂漠で、芋虫と戦って、力を使い果たして、ぶっ倒れて、それで、それで…飛竜の大群が。

そこまで思い出して、ふとおかしな事に気づく。あれ？　何で俺――

「…生きてるんだ？　食われたんじゃないのか…？」

少なくともあの芋虫よりは美味そうな俺を、飛竜が見逃すはずが無い。俺の身体がすでに奴らの胃袋に収まっていたとしてもおかしくないんだが。

そのとき。

「○×△□※□※○×△。…▽×◎」

耳に届いたのはなんとも渋い男の声。しかも俺の知る言語ではなかった。慌てて身体を起こそうと頑張ってみるが、せいぜい指が動く程度。畜生、本当に今日は厄日だな…！

俺が覚えている言葉はたった一つだが、それは世界中どこでも使える公用語だ。ほとんどの人間が知っているはずだが、あえてそれを使わずに会話する奴らは、たいていが盗賊や追いはぎといったろくでもない者共なのである。

俺はせめて姿だけでも確認しようと、頭を起こそうとする。

が、その頭に何かやわらかいものが触れ、阻止されてしまった。

次の瞬間、俺は不思議な感覚に襲われた。頭の中に暖かいものが流れ込んでくる感じ。それはやがて体中を包むように広がる。すごく心地いい。最高級のベッドに横になっているみたいだ。…寝たこと無いけど。

やがてその感覚がおさまってくると、頭に触れていたものもスッと無くなってしまった。もう少し味わいたかったな、と残念に思うと同時に、なんとなくだが、こいつらは盗賊じゃないんじゃないのか、俺がそう思えてきたとき――

不意に、俺の前に誰かの顔が現れた。

…思わず息が止まったね。なんで、ってもう、俺の目と鼻の先にいきなり現れたのはものすごい美人さんの顔だったんだから。幻獣キリンの美しさを思わせる、完璧ともいえるだろう整った顔立ちに、魚竜の亜種の鱗のような翠色の澄んだ瞳。…例えが悪いのは許してくれ。

「私の言っていることの意味が分かるか？」

驚いた。俺を見据えたまま彼女の口がつむいだのは、聞きなれた言葉。だが、俺が驚いたのは彼女が“人間の言葉を話した”事のほうだ。それは、俺がこのとき、この女性（ヒト）を同じ人間だと思っていなかったからである。なにかこう、女神様かなにかと相対してるような気分だった。

…だから俺は、半ば夢見ごこちの状態だったからなのかもしれないが、彼女が本当に人間なのか確認するため、勇気を出して普段なら絶対やらないことをしてみた。すなわち――

「ははっ、女神も人の言葉を話すのか」

――キザっぽく口説いてみたのである。…いやホント普段の俺ならしないんだよ？

……

……

…

「……は？」

俺の渾身の一撃をたった一言の疑問文で無にする美人さん。…まあ、デスヨネー。俺の遠まわしな口説き文句は理解されなかったらしい。それでも、ちょっと呆けた顔が可愛かったので、俺はまずま

ずの成功を収めたと思っていた。だが、そこに予期せぬ援護射撃が。

「わはははは！　確かに彼女は女神様のような美女だ！　中尉、この男はお前さんに一目惚れしちまったようだぜ？」

笑いながら俺の言葉の補足をしてくれたのは、最初に聞いたものよりだいぶ野太い男の声だった。頭を動かせないので主の姿はまだ確認できない。――しかし、一目惚れか。まあ、当たらずとも遠からじだな。実際心を奪われたわけだし。

そしてその女神様はというと…なんと、夕暮れ時なのにはっきりと分かるほど、顔を赤らめていた。

「…え？　あ、えっ？」

おお、うろたえてる。めっちゃうろたえてる。いまの言葉で俺のセリフの意味を理解してくれたらしい。誰かは知らんがありがとう！　あんたは実にいい仕事をしてくれた。

…でも、その真っ赤な顔のまま俺の顔を覗き込んでいるのは、その、反則だ。

「あー、その、そろそろ離れてくれるか？　俺も流石に…恥ずかしいんだが」

「えっ！？　ああ、す、すまない！」

慌てて俺の視界から消える彼女。正直もっと見ていたかったのだが、俺の精神が持ちそうに無いからこれでいい。わははとさっきの笑い声がまた響く。同時に他にもいくつかの笑い声がした。…け

っこう数がいるようだ。

「こらボルト。あまりシルヴィアをからかってくれるな。他の皆もだ。…さて」

これは最初に聞こえたダンディボイスだ。そして、俺の視界にぬっと現れる男。３０代後半くらいか？　声に似合った渋いオッサンだった。見下ろされる形になっているので少々居心地が悪いのだが、まだ身体が動かないので仕方が無い。

「ふむ。どうやら未だ満足に動けないようだな。部下の見るところでは過労だそうだが、心当たりはあるかね？」

「ありすぎて困るくらいだ。…ああ、悪いんだが、俺のポーチから黄色い液体の入ったビンを取ってくれないか？」

「君の持っていたカバンか。…少尉」

がさごそと音がする。おそらくショーイという奴が俺のポーチをあさってるんだろう。さっきからの成り行きを見るに、目の前のダンディがリーダーなんだろうな。…どうやら見つけてくれたらしく、ショーイ君が俺の視界に入ってきた。若い男だ。

「これかい？」

「ああ、それだ。重ねて申し訳ないんだが、そいつを飲ませてくれ」

といって、口をあけて待つ。ショーイ君がビンの蓋をあけて、むせないように配慮しながら口の中に流し込んでくれた。寝たままだと飲みにくい。…よい子はまねすんなよ？

「んぐんぐ、っぷは！」

俺の身体の内部に劇的な変化が生じている。疲労で動かない身体に活力が染み渡っているのだ。俺が頼んだビンの中身は『元気ドリンコ』である。正直あまり好きな味ではないのだが、効果は折り紙つきだ。…喉の渇きという誘惑に負けずに1本残しておいたのは正解だったな。

「大丈夫か？」

「ああ。ありがとう。面倒かけたな…っと」

身体を一気に立ち上げた。嗚呼、立てるって素晴らしい。皆いきなり立ち上がった俺に驚いているのがありありと分かった。――そのままあたりを見渡してみる。俺は20人くらいに囲まれていたようだ。皆似たような装備をしている。見たことの無い防具だが、ずいぶんと装甲が薄いんじゃないか？　胸とかひじとかを覆っている程度だ。あんなんでモンスターと戦えるんだろうか？

あれ、そういえば俺、防具を付けてないな。と、思ったら足元に転がっていた。外してくれたのかな。

「ずいぶんと効きがいい薬のようだな」

「ん、まあな。ちょっとマイナーなものだから、名前じゃなくて色とかで頼んだんだが…元気ドリンコ、って知らない？」

「知らんな。あれほどの効果のある薬なら、ぜひとも装備品として登録しておきたいが」

「…知らない、のか？　本当に」

ああ、と応えるダンディリーダー。なんだよ、こいつら駆け出しか？　聞いたことぐらいはあってもいいだろう。それに、1グループの人数は4人まで、っていうジンクスも知らないらしいな。…まあいいや、ドリンコはあとで調合の方法を教えてやるか。

「…さて、次はこちらから幾つか質問してもいいか？」

「お？　ああ、どうぞ」

「まずひとつ。…君は何者だ？」

俺はほんの一瞬思考がフリーズした。はぁ？　何だその質問は。哲学的な意味か？　そうでなきゃ、あの武器や防具をみてわからないってのか？

「何者って…ハンターに決まってるだろう。あんたたちも同業じゃないのか？」

「狩人（ハンター）？　違う。我々は軍人だ」

あ、なるほど軍人さんか。それなら確かにハンターの常識を知らない、というのも頷ける。

「そうなのか。俺、田舎に住んでたから軍人ってあんまり見たことなかったんだ」

「…まあ、いい。では、そのハンターがここで何をしている」

それは、俺が一番答えられない質問だ。なんたって、

「わからない」

「…何？」

「わからないんだ。というより、俺が一番聞きたいわ！　くそっ、本当に今日っていう日は…！」

「待て待て、落ち着け。　今日は、といったな。順を追って話してみろ」

ダンディの言葉を受けて、俺は今日あったことを詳細に話しはじめる。メゼポルタへ向かう山道でティガレックスと出会い、戦闘になったこと。結果崖から落ちて気を失ったこと。目が覚めたらこの砂漠にいたこと。しかたないからレクサーラに向かって6時間近く飲まず食わずで歩いたことを。途中で何度も質問を入れられるが、それにも律儀に答えていく。

「メゼポルタ、とは？」

「最近になってハンターの拠点となった広場、らしい。俺もまだ詳しくは知らない」

「では、ティガレックスとはなんだ」

「知らないのか。飛竜の一種だよ。あんまり詳しくは分かってないらしいが。轟竜とも呼ばれてるな。獰猛で、力も相当だ。怒り出すと手が付けられない…ってか、軍でも何度か討伐部隊を編成したん

じゃないのか？　俺はそう聞いたぞ」

返り討ちにあって、結局ギルドに依頼することが多かったようだが。

「大尉」

「いえ、自分はそのような魔獣は記憶しておりません」

タイイと呼ばれたのはマッチョで背が高いおっさんだ。俺の口説き文句を補足してくれた声の持ち主はどうやら彼のようである。

「帰還したら本部に確認を取る必要があるな。…次だ。何故砂漠にいた」

「そこが一番分からん。俺は確かに崖から落ちたはずなんだが、その崖もどっかに消えたし…」

「ふむ」

頭をひねる俺とリーダー。まあ、分からないものはどうしようもない、とその質問は打ち切られ、リーダーから次の質問が飛ぶ。

「レクサーラ、とは、町の名前か？」

「…はぁ！？」

いやいやいやいや！　ちょっと待ってくれ、レクサーラを知らない、だとぉ！？

「レクサーラを知らないのか！？　この砂漠に、オアシス村はあそこしかないはずだ！　あんたたちもそこから出発したはずだろう！？」

砂漠の拠点となる場所はあそこ以外に無いはずだ。だが俺の叫びに、彼は冷酷に答えた。

「我々は軍の砂漠地帯における前線基地を拠点としている。そのレクサーラからやってきたのではない。…だが、それよりも……」

「それよりも、なんだよ？」

次に彼の口から飛び出したのは、予想だにしないものだった。

「この“ガルム”砂漠において、オアシスはまだ確認されていない。故に、村などあるはずがない」

「……“ガルム”砂漠だって…？」

聞いたことの無い砂漠の名前に、愕然とする。

「そ、それは、このあたりだけの呼び名じゃないのか？　セクメーア、とか、デデ、とか…」

「俺が知る限り、世界共通でガルム砂漠、と呼称されているはずだ。だが、仮にそういった名前で呼ばれているとしても、オアシス村についての情報から、この砂漠が君の言うものと同一である可能性は極めて低い、と言わざるを得ない」

「う、ぉ…」

せっかく回復させた活力が、すべて抜けていってしまったような気がした。俺とて熟練のハンターだ。世界地図は頭の中に叩き込んでいる。その中にあの2つ以外の砂漠は存在しない。…なら、今俺がいるここは、世界のどのあたりなんだ？　どの砂漠なんだ？

俺はこのありえない話を受け止めきれず、座り込んでしまった。

「ショックを受けているところを悪いんだが、まだ質問が残っている」

…容赦ねぇな、このオッサン。だが、今はその方がありがたかった。

「…ああ、何でも聞いてくれよ。いまは他のことを考えていたほうが気がまぎれるから」

「…強いな、君は」

「ハッ、ハンターってのは、強くなきゃいけないんだよ」

やせ我慢だったが、これだけは譲れない。譲ってはいけない。ギリギリのところで気力を保ちつつ、ダンディの次の質問を待つ。

「これが最後の質問だ。我々は、これが一番知りたい。――この場所で、一体なにがあった」

最後の質問がそんなもんでいいのか、と俺は思う。だって、見りゃ分かるだろ。

「簡単だ、砂漠を歩いてたら、こいつらに襲われた。だから、ぶった斬ってやった。…それだけだ」

この現場を見れば、一目瞭然だろう。俺はそう心の中で苦笑していたが、それを告げた瞬間、あたりが妙に騒がしくなった。なんだろう、とのろのろ頭をあげて周りをみると、みんな俺のほうを変な目で見ながらコソコソ話していた。…何？　俺、何かした？

「…確認しておきたい。これは、この魔獣たちは君が一人で、殲滅したのか？」

やや疑うような目つきで俺を見るオッサン。しかたないので、最初から説明する。

歩いていたら、この芋虫が1匹出てきたこと。腹が減っていたので食ってやろうと狩ったら、3匹出てきたこと。そこからどんどん増えたので、かたっぱしからすべて斬ってやったこと。

「んで、空腹と疲労に耐え切れずにぶっ倒れた。…あ、そうだ。あんたたちが来てくれなかったらあのまま骨になってたと思う。遅くなったけど、礼を言う。ありがとう」

と、伝え終えたところで、場の空気がさらにおかしなものになっていたことに気づいた。目の前のダンディリーダーは黙り込んでなんか考えているし、タイイだかボルトだか呼ばれていたオッサンは興味津々と言った顔で俺を見ている。ショーイ君はなんか目を輝かせてるし、他の面々も同じように目をキラキラさせている奴もいれば、化け物でも見る目で見てる奴もいた。

ふと、あの女神様が目に留まった。彼女はどんな目をしているの

かと思って視線を向けると、目があってしまった。美しい翠色が俺の目をしっかりと見ている。残念なことにすぐにそらされてしまった。…しかし、俺は彼女の目の中に、悲しみの感情が浮かんでいるのを見た様な気がした。

「ハンター君」

――あの渋い声が俺のことを呼ぶ。それで我に返った。なんだ、と応える。

「君についての話をもっと聞かせてもらいたい。これまでの人生や、ハンターという存在についてだ。代わりに俺は君が知りたい情報をできる限りで提供しよう。どうだ？」

「かまわないよ。俺もどうすりゃいいのかわかんないし。あんたからの情報の中に何かしら手がかりがある可能性もあるからな」

「決まりだな。…我々はこれから基地へと帰還する。ついては、君にもそこまでついてきてほしい」

「ああ、わかった。どれくらい歩くんだ？」

「歩く？」

俺の質問にリーダーは一瞬眉をひそめると、いきなりクックッと笑った。

「歩くことは無い。君には分からないかもしれないが、本来この砂漠を歩いて渡ろうなどというのは自殺行為に等しいんだよ。…我々は空を行くのだ」

「空を？」

観測所の気球を思い出す。ああいうものを使うのだろうか。だが、何を使おうが――

「空はもっとやめたほうがいいぞ」

「…何故だ？」

いぶかしむ彼に、気絶する寸前に見た飛竜の群れの話をする。どんなものに乗ろうが、奴らに襲われればひとたまりも無いぞと注意する。が、ダンディはそこで再びクックッと笑った。

「心配は無いよ。君が見たそれは、我々のことだ」

「えっ？」

今度は俺がいぶかしむ番だった。が、彼を見ると黙って空を指差していた。俺も空に目をやる。

そこには――

―グゥゥウウウウウ―

―ギャォォオオオオオ―

さまざまな種類の、見たことも無い飛竜がこちらを見据えて空中（ホバリング）で静止していた。

「マジかよ…」

「…そういえば、自己紹介がまだだったな」

呆けている俺を尻目に、彼は飛竜の方へと歩き出す。その姿は、まるで人でありながら飛竜(彼ら)の王であるように見えた。

「帝国軍第一竜騎士部隊隊長、アーネスト・フォン・ヴォーネハイト中佐だ。よろしく頼むぞ、狩人(ハンター)」

第４話　Ｏｎ　ｙｏｕｒ　ｍａｒｋ（後書き）

と、ここまでインナー１枚で話をしているハンターさんでした。

予定では次もまだ世界観説明回。面白くないのは分かってるんですが基礎的な部分はやっとかないと後が大変。もう少しお付き合いください。

防具（ｒｙ

第5話　Ｇｅｔ　ｓｅｔ（前書き）

あっそれ5話目！

じわじわとお気に入りに入れてくださっている方が増えてまいりました。皆さん、ありがとうございます。

感想くださっている方、重ねてありがとうございます。自分の脳内妄想とやる気が続く限り、がんばっていきたいと思います！

第5話　Get　set

―Ｓｉｄｅ　？？？―

僕の名前はバーナード・ウィリア、歳は２２。誉れ高い帝国軍人だ。幼い頃は何か将来の夢を持っていたと思うが、実家が貧乏だったため、長男であった僕はその使命感からいつしか給料のいい帝国軍への就職を希望していた。

１７のとき、晴れて軍人となった僕が最初に送った仕送りで家族がお腹いっぱいご飯を食べている様子を記録した映記石が実家から送られてきたときは、軍人になって本当によかったと涙した。

お金のため、と参加した軍だったのだが、意外と僕の性にあっていたようで、同期にくらべればやや早めの出世だったと思う。そしてつい三ヶ月前のこと、物は試しとエリートと名高い第一竜騎士部隊への入隊試験に挑戦してみると、最低ラインギリギリではあったが合格することができた。同時に階級も少尉へと昇進し、下士官時代にくらべてグンと給料はあがった。これで家の暮らしはもっと楽になるだろう。

ただ、この部隊の訓練の厳しさといったらなかった。同期も何人かがすでに除隊願いを提出している。特に僕はいままでの飛竜搭乗時間が他の隊員と比べあまりにも足りなかったため、毎日毎日特別訓練と称して飛竜に乗せさせられた。おかげで今は飛竜と意思疎通できるほどにまでなったが。

そして今日は、僕の竜騎士としての初任務だった。目的は“砂漠の死神”グランドワームの殲滅。ボルト大尉が「初陣がこれとはつ

いてねぇな」と笑っていたが、僕が笑えるはずもない。事前の仮想空間上での訓練では幾度も相手にしてきたものの、実戦でまともに戦えるのか、自信が無かった。無論、僕も軍人として小型、中型魔獣との戦闘経験はあったが、“死神”は桁が違う。実際、僕は作戦前の移動中、ずっと震えていた。

しかし、僕の初陣は予想だにしない形で終わってしまった。

「うおぉぉっ！　すげぇぇえ！　これが飛竜どもの視点なのかぁぁあ！！」

「ああもう、少し静かにしていてくれよ！　フリッツが怖がるだろう！」

相棒である飛竜、フリッツをなだめながら、自分の後ろに乗っている彼に注意を促す。

あの出会いから３０分ほどたっただろうか、すでに日は落ち、月が砂漠を照らしている。竜騎士部隊は来たときよりも一人多くなって、砂漠の夜空を一路、帝国軍駐屯基地へ向かって飛行していた。

ちなみに、彼はいまだインナー１枚の姿である。というのも、フル装備の状態では飛竜が重さに耐えられないのである。仕方ないので、装備は部位によって分けられ、それぞれが別の飛竜によって運搬されていた。

「おお、悪かった。すまんなぁ、フリッツ！」

―グゥゥウウウウウ―

…狩人（ハンター）と名乗るこの男があの武勇伝を語ったとき、僕はまるで神話の中の英雄を目の前にしているかのような気持ちをもった。…あの化け物の群れを、たった一人で。僕には到底真似できないことだ。…口には出せないが、隊長にすらできないと思う。

「…なあ、ショーイ君」

はしゃいでいた彼が、唐突に僕に話しかけてきた。

「ん、どうかした？」

「俺、これからどうしたらいいと思う？」

このとき、僕は彼がすごく身近な存在になったように感じた。凄まじい力を持ってはいるが、やはり同じ人間なのだ。いきなり知らない場所に来てしまえば、不安になるのも当たり前だろう。

「…基地に行けば、帝国軍が使っている大型転移魔法石がある。座標さえ分かれば、世界のありとあらゆる場所に行ける。その、君が言う街や村の位置が判明したら、すぐに帰れるよ」

「……」

まだ安心しきれないのか、無言になってしまったハンターさん。何か声をかけようかと考えていると…

「……まあ、それは向こうについてから、か。ところでショーイ君。…魔法石って、何？」

――僕は漠然と思った。彼には何か予想以上に重大なことが起き

ているのではないかと。

―Ｓｉｄｅ　バーナード　Ｅｎｄ―

……

……

…

俺の命を脅かしたあの砂漠を出発すること１時間。記念すべき初めての飛行体験は終わりを告げ、例の帝国軍？　の基地に到着した。

「オーライ！　オーライ！　あっ、おい待て、もうチョイ右だ！」

「…しっかし凄いな。初めて見たぜ、あんなもの」

いま行われているのは、俺の“戦利品”の荷下ろしだ。そう、例の芋虫…たしかグランドワーム、だったかの死骸である。出発する際、捕獲用に持ってきた檻がムダになった、とぼやいていたダンディ、じゃない、アーネストに、「なら代わりに死骸を１つか２つ持っていこう、ハンターがどういうものかを教えるのに役立つ」と提案したら、快く応じてくれた。

「ハンター君」

そのアーネストが俺の近くにやってきた。

「おう。…なんだ、無理言って悪かったな。あれを支えてた飛竜もへいこらいってたし」

「問題は無い。あれで君の強さの秘密が分かるのなら安いものだ。それに、飛竜たちもそうヤワではないさ。一晩も休めば元気になるだろう」

「強さの秘密ねぇ…」

確かにあのサイズを１０体以上相手するのは大変ではあったが、それは俺がベストでなかったからという理由だ。普段ならあの程度、３０でも４０でもたいしたことは無い。…なぁんて、こいつに言ったらどんな顔するかな、と内心でほくそ笑む。

「それで、さっそく君の話を聞きたい…ところではあるのだが、これからデブリーフィングがあるのでな。君はとりあえず、食堂でくつろいでいてくれ。話は通しておく」

「……」

「どうした？」

「…食事のありがたみをいま改めて感じているところだ」

「フッ、忘れないようにな……ああ、君、ちょっと来てくれ」

アーネストは近くにいた女の兵士さんをつかまえると、なにやらいろいろと指示していた。彼女のほうはガチガチに固まっている。

…そういえばアーネストはどのくらい偉いんだろう。飛んでる途中、ショーイ…いやバーナードにいろいろと教えてもらったんだが、アーネストは中佐とかいう地位にいるらしい。バーナードは少尉。あのマッチョ、ボルトだったかは大尉。そして、あの女神様、ええと…シルヴィアさんは中尉。…くそ、なんでこんなややこしいんだよ。

「待たせたな、ハンター君。彼女が基地内を案内してくれるから、ついていってくれ。それと、軍服を一着用意するから、適当に着替えるように。その格好はあまり歩き回るのには適していないからな」

…いまの俺はインナー姿。どうやらこれでは駄目らしい。村では気にも留められてなかったが、やっぱり田舎だからなのかなぁ…？

「あと、君の鎧と剣は俺が預かっておく。それらについても訊きたいからな」

「ああ、分かった。じゃ、また後で」

「一時間もすれば終わる。頃合になったら直接俺の執務室へ来てくれ。その場所も彼女が知っている」

アーネストはそう言って立ち去っていった。残された俺と案内を任されたらしい女性。

横に立っている彼女をあらためて見る。ずいぶんと若い子だ。シルヴィアさんも若いと思ったが、彼女はもっと若く見える。まだ20にもなってないんじゃないか？

…まあ、いいや。とりあえず――

「えっと、じゃあ、案内よろしく。…名前も教えてもらっていい？」
「…っああ！　はい！　アリス・ウェンライト二等兵です。こちらへどうぞ」
――シルヴィアさんを綺麗な美人と表すなら、アリスさんは可愛い美人といえるんだろう。どうも美人に縁があるな、と思わずにやけてしまう俺であった。

……

……

…

「……中佐のご友人とうかがったんですけど、軍の方、なんですか？」
「もぐもぐもぐ…っん。いや違うよ。俺はハンターなんだ。…えと、君もやっぱり知らない？」
「狩人（ハンター）さん、ですか？　森や山で動物とかを獲って暮らしている？」
「…うん、そうか。うん。…まあ、似たようなもんだ」
ところ変わって、俺はアリスさんと食堂にいる。今は食後のデザ

ートタイムだ。…嗚呼、食事って素晴らしい。村の俺の家のキッチンでがんばってくれていたアイルーたちに、いまなら好きなだけマタタビをプレゼントしてやれる。

「それにしても、狩人さん達って普段からあんなに食べるんですか？　凄い量を召し上がってましたけど」

「ハンターならまだまだ足りないくらいの量だ。それぐらいハードな職業なんだよ」

「へぇぇ…」

私も許可をいただいてるので、と一緒に食事した彼女があきれたような顔をしてたっけな。限界まで腹が減っていた俺に、底などない。メニューに載っていた定食を片っ端から食べてやった。さて2週目だ、と何度目かの注文に向かったら、もう勘弁してくださいと泣きつかれてしまったので、仕方なくあきらめて、残った時間をアリスさんとの会話に費やしている。…ちなみに、メニューは知らない文字で書かれていたのだが、不思議なことにその意味は理解することができた。うーん、やっぱりこれも…

せっかくなのでアリスさんに聞いてみる。

「あー、アリスさんも、その、ま、魔法って使えるの？」

「ええ、使えます。というか私、魔法兵として軍に入りましたから」

「……」

これである。ここに着く前にもバーナードに魔法石について聞い

たが、俺の常識は完全にぶっ壊れてしまった。

魔法石。

彼の説明によると、それはある特殊な石に魔法、とやらをこめる事で、魔力…だかがない一般人でも、そのこめられた魔法が一定の回数使えるらしい。石が大きいほど、より強い魔法、より多い回数がいれられるのだとか。

…魔法なんて、御伽噺の世界の中だけだと思ってたよ。

「あのさ、俺、魔法って見たこと無いんだ。…なにか簡単なのを見せてくれないか」

「かまいませんよ。…えっと、何がいいかな…」

なんでもないことのように言うアリスさん。…俺に残された常識という名の壁が粉々になるのは時間の問題のようだ。

「…では、いちばん単純な“浮遊魔法”をこれにかけますよ」

と、テーブルの上に置いてある調味料のビンに人差し指を突きつけた、次の瞬間――

―フワッ―

「……マジかよ」

彼女の指先が淡い光を帯びると同時に、宙に浮く調味料。種も仕掛けも無かったことは、俺が一番分かっている。あのビンは、さっ

きまで俺の食事に大活躍していたのだから。彼女はそれを右へ左へと動かしても見せた。それに目を奪われる俺。

気がつくと、ビンはテーブルの上へと戻っていた。彼女の指先の光も消えている。

「…初めて見た魔法はどうでしたか？」

「いや、なんというか…いままでの常識をぶち壊された」

あはははと屈託無く笑う彼女。俺はさらに質問してみる。

「その、魔法は俺でも使えるのか？」

「うーん、“資格”は誰にでもあるんです。要はそれが“目覚めている”かどうかなんですよ」

「目覚めている？」

ここからは魔法学の基礎部分なんですが、と彼女は前置きし、言葉を続ける。

「一般的に、誰にでも魔法を扱うための力、つまり“魔力”が眠っているとされています。勿論、その量は人それぞれですが。しかし、それを目覚めさせるには、“何らかの要因”がいるんです」

「…それは？」

「現段階ではまだ分かっていません。それは魔法の知識である、という意見もあれば、いや魔法を愛する心だ、なんて考えもあります。

」

「じゃあ、そのわけの分からん何かで目覚めない限り、魔法はつかえないのか？」

「それがそういうわけでもないんです。…両親のどちらかが魔法を扱える場合、その子供は最初から魔法が使えるんですよ。」

当然だが、俺の親は魔法なんか使っていなかった。しかし、重要なのはそこではない。“魔力”は受け継がれる、ということ、それはつまり…。…彼女の説明は続く。

「でも、そのときに子が持っている魔力量は、親の８割以下である、という研究結果が出ています。つまり、代を追うごとに魔力はどんどん枯渇して、どこかで途切れてしまいます。そこからはまた覚醒を待つしかないのですが…」

一泊置いて、結論へ。

「一度覚醒した素質が磨耗しきるのは数百年はかかりますから、たいていの人は大なり小なりの魔法が使える、という認識でいいと思います」

――このとき、俺の心の中にある考えが浮かんだ。…いや、もはやそれは確信に近いものだったんだろう。

「どうも、俺は“目覚め待ち”みたいだな。親は魔法を使えなかったし」

「ですが、そういった人たちのために“魔法石”がありますから。

実際、いままで不自由しなかったでしょう？」

「…まあ、確かに」

魔法なんていう概念が無かったんだから、不自由も何もない。

ふいに、アリスさんがあっと声をあげた。

「もうそろそろお時間ですね。中佐の執務室にご案内します」

そう言って席を立ったアリスさん。俺はその後に黙々とついていく。アーネストの執務室で最初に何をするべきかを、心に決めて。

……

……

…

コンコン。

「入れ」

「よっ」

「し、失礼します！」

「…二人とも、食事は楽しめたか？」
「もうすこし量を多くするように要求する」
「はい！　お、美味しかったです！」

アーネストの執務室の中は、結構な広さではあるが地味だった。飾ったようなところは何も無く、書棚と大きな机がある程度。…していてあげるなら、彼の傍らには置物のようにボルトのオッサンが突っ立っていることか。

アリスさんも一緒に入ってきたが、彼女は初めて見たときのようにガチガチだ。もう一刻も早くここを出て行きたいというオーラが見える気がする。

そんな願いが通じたのかどうか、

「ウェンライト二等兵、ご苦労だった。下がっていいぞ」

「！！　はいっ！　失礼しますっ！！」

固まっていたのが嘘のように、流れるような動作で退出するアリスさんだった。

「…俺はフレンドリーに部下と接するよう心がけているんだがな」
「わはははは！　そりゃ無理ってもんですよ、『神槍』のアーネスト・フォン・ヴォーネハイト中佐どの！」

ちょっと悲しそうなアーネストに追い討ちをかけるマッチョ。…『神槍』ってのはなんだろう。称号かなんかかな？

さて、とアーネストが話を始めようとするが、俺にはその前にやらなきゃいけないことがある。

「その前に、あんたに1つ見せてほしいもんがあるんだが」

「ほう、奇遇だな。俺も話の前に君に見せたいものがある」

――なんとなくだが、俺も奴も同じ事を考えているような気がした。

「「世界地図だ」」

第5話　Ｇｅｔ　ｓｅｔ（後書き）

防（ｒｙ　次で流石に名前出るよ！　ごめん石投げないで！

執務室でのお話は今回だけで終わるつもりだったのですが、気がついたら６，０００文字だったので妥協。次の回にまわします。

この世界での魔法の設定はこんなもん。属性とか入れるとややこしくなるので「魔力」１本で。まあ後付が出る可能性もありますが。

もうお気づきとは思いますが、ハンターさんの名前はあえて出してません。男性、という区切りはありますが、世界中にはたくさんの「ポッケ村の英雄」がいることでしょうし、もしあなたがＰ２Ｇプレイヤーなら、ぜひともあなたの男性ハンターの名前を付けてあげてください。変な名前だろうと本望です。

ところで、二次創作作品の登録が可能な良いサーチエンジン、ないですか？　読者様がよく利用されるようなサイトありましたら、ぜひ教えてください。

第６話　Ｇｏ！（前書き）

６話目ー、６話目いかがっすかー

ユニークもお気に入り登録も増え続けており、嬉しい限りです。
今回は今までで最長の７０００文字超。おやつ片手に、休憩しながらご覧ください。

第6話　Ｇｏ！

「「世界地図だ」」

俺とアーネストの口から出た言葉はまったく同じだった。その顔を見れば、口元が上がり、不敵な笑みを浮かべている。…お見通しってか、この野郎。

アーネストは机のかげから長い棒状のものを取り出すと、俺に差し出した。その正体は丸められた世界地図なのだろう。無言でそれを受け取る。

「用意がいいな？」

「なに、俺なりに君がどういう存在なのかを考えた結果だ。…君の方は、用意できてるのか？」

「…何のだ」

「それを見る用意…いや、覚悟だよ。君も自分の今の立場に何か確信を持ったからこそ、地図を見ることを望んだんだろう？」

その通りだ。俺は先ほどからズバズバと内心を言い当ててくるアーネストに苦笑いする。だが――

「なあに、怖いっちゃ怖いが、モンスターとにらみ合っているほうがずっと怖いさ」

そう彼には言ったが、どちらかといえばこれは自分に言い聞かせ

ているものだ。

アーネストは何も言わない。黙って俺がこれを開くのを待っている。

――まあ、あまりグダグダしてるのも良くないよな。俺は、一気に世界地図を広げた。

描かれているのは海岸線。大きな山の絵とその名前。ガルム砂漠、と書かれた白い部分。ところどころの点は街や村なのだろう。だが――

「…やっぱり、違う」

「…そうか」

そこに、俺の見知った世界はなかった。海岸線も、山の位置も、何もかもが違う。…分かってはいたんだが、結構、キツい。

「…おい、大丈夫か？」

さっきから成り行きを見守っていたボルトのオッサンが、俺に声をかけてくれた。

「なんだよ、俺そんなに酷い顔してる？」

「いや、お前、気づいてないのか？」

「は？」

まさか、気づかないうちにみっともなく泣いてたりしたのか、と顔をこすっていると、アーネストが口を開いた。

「君はいま、笑っていたぞ。ハンター君」

「…何だって？」

「だから、君は笑っていたのだ。それも心底うれしそうな顔で」

笑ってた？　俺が？　この地図を見て？

なんだか自分のことが分からなくなってしまった。俺はどうして笑っていたんだろう。まったく知らない世界にいると分かったのに。もうポッケ村のみんなにも会えないかもしれないというのに。

「結論を言わせてもらってもいいか？」

と、アーネストがこの話題を打ち切ろうとする。…まあ、いいか。考えててもしょうがない。いずれ分かるときが来るだろう。そう割り切って、どうぞ、と俺は先を促す。

「君は、この世界とは別の世界から何らかの方法によって転移してきたのだろう。…確かにこの世界には異なる場所へ転移、いや“転送”する魔法はあるが、異なる世界のものが転送されたという例を、少なくとも俺は聞いたことが無い。ああ、一応聞いておくが、“君の世界”にもそんな魔法は無いだろう？」

「無いな。そもそも、魔法が存在しない」

「そうなのか、ふむ…。ああ、大尉」

「はっ、自分の記憶にもありませんが、そのような事例が過去に無いか洗い出して見ましょう」

「頼む。…さて、ハンター君」

「おう。…なんか、悪いな。いろいろと」

「かまわん。とりあえず、私としては君を帝国軍の保護下に置きたいと思う。どうだ？」

「まあ、今はどうすればいいのかまったく分からないからな。俺からも頼む」

どうやら俺の今後の生活は、しばらくの間なんとかなるようだ。多分、アーネストの方にもいろいろと計算はあるのだろうが、今は利用されるだけされてやろう。…もっとも、こっちも利用させてもらうがな。

「決まりだな。…ようこそこの素晴らしき世界へ。異世界から来た狩人よ」

……

……

…

「では、ここからは情報交換といこうか。そうだな…とりあえず、“ハンター”と呼ばれる存在について教えてもらおうか」

「…“向こう”じゃ当たり前の職だからな。なんて説明すればいいかなあ…」

俺はゆっくりと自分の経験を交えながら語る。モンスターを狩る専門職であること、依頼を受けて行動し、その報酬やモンスターの素材を売った金で生計を立てていること、ほとんどのハンターはギルドに所属していて、上からG級、上位、下位にランク分けされていること、などなど。

「そちらには、君のような力を持った人間がたくさんいるのか？」

「あー、自慢じゃないけど、俺は向こうでも結構有名なハンターだった。俺くらいのレベル、となるとぐっと数は減るだろうが…」

「…減るだろうが？」

ちょっともったいつけてやる。何でもかんでも見透かしてるようなこのダンディを、少しぐらいは驚かせてやらないとな。

「それでも、あの芋虫…グランドワームだったか、あの程度はG級ハンターなら誰でも狩れる」

「……なんとまあ」

言葉を失っているアーネストを見て、俺は会心の笑みを浮かべる。隣にいるボルトも絶句しているようだ。

「…ハンターについてはだいたい分かった。次は君の装備について訊きたい」

「そういえば、この部屋には俺の太刀と防具がないな」

「あれらは別の場所に保管している。いま持ってこさせよう」

アーネストはそういって、机の上に何気なく置かれていたものに手を伸ばした。彼の指先が触れた瞬間、それは淡い光を帯び始める。…アリスさんの魔法と同じだ。

「中尉、俺だ。ハンター君の持っていたものをすべて、執務室まで持ってきてくれ。――ああ、何人使ってもかまわん。大至急頼む。…重いから気をつけてな」

俺はいきなり独り言をはじめたアーネストに驚いていたが、話している相手はどうやらシルヴィアさんのようだ。…やっぱりいまのは魔法か。

「お前も魔法が使えるのか」

「ん？　魔法のことは説明していないはずだが、何故知っている？」

アリスさんに訊いたと伝えると、そうか、説明する手間が省けた、

とアーネストはいきなりその黒い石をこちらへほうり投げてきた。俺はあわててそれを捕まえる。

「それが魔法石だ。それに込められている魔法は“通信”。そのサイズのものならば、この基地内にいるものなら誰とでも話せる」

「へぇぇ、便利なもんだな」

「だが、向こうも通信の魔法石か、通信魔法そのものを持っていなければ使えないが」

しばらくその手のひらサイズの石を眺めていたが、そこでふと気づいた。

「あれ？　これ砂漠でいくつか拾ったな。あれが魔法石だったのか」

「ああ、それはおそらく魔法石の原石、“魔鉱石”だ。小さなものはよくそうやって落ちている。たいていは小さすぎて碌な魔法がはいらないがね」

言われてみると、俺が採取したものはこれの半分ぐらいの大きさだった気がする。だけど――

「グランドワームの腹の中にあったヤツはこれの倍くらいの大きさだったな」

「ほう、それはなかなかのサイズだな。…グランドワームは動物のほかに鉱物を食料とする。おそらく、魔鉱石は消化することができずに、胃の中に残ったままだったのだろう」

「その、魔鉱石は普通どうやって手に入れるんだ？」
「魔鉱石を大量に埋蔵している鉱山…“魔鉱山”と呼ばれているが、そこでの採掘が基本だな」
と、こんな具合で話をしていると――
コンコン。
「どうやら荷物が届いたようだ。…入れ」
ガチャ、っと入ってきたのはシルヴィアさんを先頭にした運搬部隊数人。バーナード君の姿も確認できる。よく見ると皆、顔に見覚えがあった。…ああ、竜騎士部隊のメンバーだ。
「ご苦労だった。せっかくだ、お前たちも聞いていけ」
…観客が増えた。まあ、俺はそんなことで緊張するような人間じゃないが。
「あー…じゃ、まず防具の説明からにするか」
――それは覇竜（アカムトルム）の素材を使って作られた一品。その漆黒の装甲は、一切の攻撃を無に帰す。…実は、“向こう”でも世界で俺だけが持っている防具だったりする。
昔、ギルドから依頼された任務、それは火山の奥に追い込んだアカムトルムを討伐してほしいというものだった。何人ものハンターが栄誉と報酬を求めて向かったが、そのうちの何名かは帰ってこなかった。それほどに危険なモンスターだった。

そんな奴に、俺は一人で立ち向かった。通常の飛竜とは比べ物にならない大きさ、強さを持つソイツとの戦いは何日にも及び、俺は重傷を負いながらもかろうじて仕留めることに成功した。

そのときに、ギルドからその栄光の証として贈られたのが、倒した覇竜の死骸を丸々使って生み出されたこの『アカムトシリーズ』である。世界で俺だけが手にした栄誉。俺だけの防具。G級モンスターの攻撃を食らってもヒビ一つ入らないこの防具を、俺は好んで使用した。…村を出るときもこれだけは弟子に譲らなかった。

と、ここまで語って、ちょっと熱が入りすぎたか、と反省しつつ周りの様子を見ると…

うわっ！　皆凄く輝いた目で俺のこと見てる！　特にバーナード君の目がやばい！　もう熱線とか出そう！

…だが、シルヴィアさんだけは違っていた。どこか憂いを含んだような目だ。…まあ、他人の自慢話なんか聞きたくないか。

とにかく、俺がそんな場の雰囲気に若干引いていると、アーネストが口を開いた。

「…我々も帝国の騎士なのでね。武勇伝を聞けば、その手にした栄誉にあこがれるものなんだ」

ああ、なるほど。なんとなく納得してしまう俺。と、ここで今まで静かだったボルトのオッサンが俺に問いかけた。

「なあ、自分が殺した生き物を身体に纏うってのは、どうなんだ？

気味悪いとかないのかよ？」

「そこは、考え方の違いだな。俺たちハンターは、たとえモンスターに殺されても文句は言わない。全力で戦った結果なんだからな。だから、逆に殺されたモンスターもまた、結果に文句は言わないだろう。そういう考えを持っている。もちろんこれは、人間の勝手な考えだけど」

だからこそ、その死骸で作られた武器や防具を使うことに抵抗を抱かない。

「そこから、“倒した相手が自分を認め、共に戦ってくれている、って認識を得ることに繋がるんだが…」

「ふーむ。わからんでもねぇな」

俺自身、下手な説明だなと思ったが、ボルトは理解してくれたようだ。なんかシルヴィアさんもうんうん首を動かしてる。

「まあ、鎧についてはそのぐらいでいいだろう。ハンター君、次はその剣なのだが…」

「おう、わかった。…こいつは飛竜刀・椿といってだな…」

――こうして、夜は更けていく。俺は、まるで村の子供たちに話を聞かせているような懐かしさにとらわれながら、竜騎士たちに熱心な説明をしていた…。

……

……

…

今、俺は基地の廊下を歩いて、俺にあてがわれたという部屋に移動していた。…なんと、シルヴィアさんと一緒に！

だが、残念なことに色のある話ではなく、単純に案内されているだけだ。…重ねて言うが、残念である。

――グランドワームの胃から取り出した魔鉱石を見せると、アーネストはひどく感心していた。なにやらあれはかなり高純度の鉱石だったらしく、そうそう手に入らないものだとか。俺が持っていても仕方の無いものだから、助けてもらった礼だ、と差し出したのだが、「今はそうかもしれないが、君にも魔力が覚醒するときがくるかもしれない」と突っ返された。…魔法、俺も使えるのかな？

明日は、持ち帰ったワームの死骸を剥ぎ取る様子を見せる約束をしている。実際、俺ももう少し詳しく観察して剥ぎ取りたかったので、僥倖だ。砂漠じゃそんな余裕無かったからな。

それと、竜騎士部隊の面々には、俺が他の世界から来たことを打ち明けている。皆信じられないような顔をしていたが、事実だからしょうがない。ま、このことは一人でも多くの人に知ってもらってたほうがいいだろう。何か帰るための情報が見つかるかもしれないし。

と、今日あったことを思い返していると――

「…ハンター殿」

「っ！　な、なんだ？」

不意に、シルヴィアさんが話しかけてきたのだ。執務室を出てからまったくの無言だったので、いきなりの声に驚く俺。…もちろん、彼女との会話は大歓迎である。

「貴方は、どのようにしてそうまで強くなったのですか？」

「…どのようにして？」

その質問にすぐに答えを見出せず、俺は思わず聞き返してしまったが、彼女の質問は続く。

「どれほどの訓練をすれば、どれほどの戦闘を経験すれば、あの“死神”の群れを一人で蹴散らせるほどの力を手に入れられるのか、お教えいただきたい！」

「……うーん」

彼女の美しい翠色の瞳には、強い意志がやどっていた。半端な答えじゃ納得しそうにないな、これは。

「じゃあ、その前に１つ質問。…シルヴィアさんは、何でそんなに強くなりたいんだ？」

「……国に、認めてもらうためです」

「国に？」

はい、とシルヴィアさんはうなずき、話を続ける。

「私の家は、代々優秀な帝国軍人を輩出してきました。現在、家督は父上が継いでおられますが、やがては、その子供に家督を譲ることになるでしょう」

「ふーん。じゃ、いずれはシルヴィアさんが継ぐことになるの？」

家系とかそういうことに疎い俺だが、話からすればそうなるんじゃないか？　そう思ったのだが、彼女は首を横に振った。

「帝国の法律で、家督を継ぐものは男子、と決められているのです」

「それなら、兄貴とか弟さんとか？」

「…私は、一人娘です」

悲しそうに彼女は答える。あれ、そうすると…どうなるんだ？

「その場合、どこか別の由緒ある家から、私の婿として招き、家督につかせることになります。…私は、それを許したくはない！」

「……」

「たしかにそれで、家名は残ります。ですがその場合、我が家はその婿の家の下の立場に立たされることになるのです！」

「なるほど……」

「…父上は、それでもいいといいます。さらには、もし私の目にかなう男がいなければ、最悪、自分の代で終わらせてもいいとまでも」

彼女はおそらく、貴族と呼ばれる人なのだろう。それも、自分の家にとてつもない誇りを持っている。

「ですから、私は帝国に認めてほしい。女の身であっても、家督をついで良いと。そのためには…」

「栄誉…功績か」

無言でうなずくシルヴィアさん。

「特例を認められるほどのものが必要です。――私は、貴方にはそれを成し遂げられるだけの力があると思っています」

「……」

「どうか、ご教授いただきたい。それだけの力を手に入れる術(すべ)を」

俺の目をまっすぐ見つめ、懇願するシルヴィアさん。そんな彼女に、俺は――

「…俺がまだ10にもなっていない頃だ。両親が、ある飛竜に食われて死んだ」

自分の身の上話を始めた。…誰にも話したこと無かったんだけど

なぁ。いきなり始まった暗い話に、息を呑む彼女。

「天涯孤独になった俺は、親父の知り合いの男に引き取られた。その人も、またハンターだった」

ハンターといっても、引退間近のじいさんだったが。

「そのとき俺の頭の中にあったのは復讐だけだ。仇をとりたい一心で、その人に弟子入りし、ハンターとしての技術を身に付けていった」

「…仇は、とれたのですか？」

「いや。俺がそいつの居場所を突き止めたときには、すでに他のハンターに狩られたあとだった」

「そんな…」

「それからしばらくは、抜け殻のようになってね。毎日家でボーッとしてた」

シルヴィアさんは俯いてしまっている。…これはさっさと明るい方向に持っていかなきゃな。

「そんな中で、俺に転機が訪れた。とある田舎の村で、専属のハンターをやらないかって誘いが来てね。自分でもこのままじゃ腐ると思ってたから、承諾して村に向かった。だがその途中で、前に話したティガレックスに襲われて大怪我した」

俺の新しい目的が見つかったのは、ここからだ。ここからを、彼

女に話したい。

「幸い目的だった村にいたハンターに助けられたんだが、流石に悔しかった。ビビッて何もできなかったんだからな。そこから、俺はそいつを狩るために力を求めた。たくさん依頼を受けて、たくさんモンスターを狩って。そしてとうとう、奴を狩ってやることに成功した。嬉しかった。俺はここまで強くなったんだ、ってな」

シルヴィアさんの目が、いまは再び俺のほうを向いている。もうすこし、話をさせてくれよ？

「そこからは、より強い飛竜を狙って挑んだ。なんども死にかけたし、何度もあきらめかけた。それでも立ち上がって、気がついたら村の英雄、なんて皆から呼ばれるようにまでなってた」

もちろんこんな生き方、彼女にはできないだろう。だけど、１つだけ言えることがある。

「…つまり、俺が強くなれたのは、常に上の相手と戦ってきたからだ。そいつを超えることを目指して、ただひたすら進むこと。それが、俺の強くなるための術だ」

「常に、上の相手を…」

「そう。シルヴィアさんが超えたい相手って、誰かいる？」

少し考えるそぶりをして、彼女は答えた。

「……父、です。私は、あの人にあこがれて竜騎士となった」

「なら、とりあえずはその親父さんより強くなることを目指せ。…あ、“出来るかどうか”なんて考えたらそこで負けだからな。焦っても駄目だ。…だけど、振り返らず、突き進め。自分で父親を超えたと思える、その日までな」

「……はいっ！」

――それは至高の笑顔。初めて見た彼女の笑顔は、これまで見てきたどんなものよりも美しいと思えた。

「ああ、そういえば、俺シルヴィアさんのフルネーム、知らないんだ。良かったら教えてくれるか？」

「勿論です。私はシルヴィア・フォン・ヴォーネハイト。シルヴィアと呼び捨てで結構です、ハンター殿」

「なら、俺にも敬語を使わずに話してくれて――」

「それは私自身が許せません。貴方は私の師となった方ですから」

うっ、と詰まってしまう俺。いやはやなんとも、彼女はきっと自分にも他人にも厳しい人だね。

「…わかったよ。じゃ、引き続き案内をよろしく、“シルヴィア”」

「ふふっ…はい。こちらになります、“ハンター殿”」

見るものを虜にするような微笑を浮かべて応えると、シルヴィアは踵を返して俺を先導する。凛々しく歩く彼女に追従しながら、俺はこれからに思いを馳せていた。

…つい数日前まではこんなことになるとは思っちゃいなかったが、“こちら”で俺はまだ生きている。なら、どこまでも突き進むまでだ。ハンターとして、俺個人として、な。

ふと目を移した廊下の窓の外では、“今まで”と変わらない月が、淡く、優しく光り輝いていた。

第6話　Ｇｏ！（後書き）

はい、防具の名前でましたー！　厨二装備とか言わない。かっこいいは正義。

えー、1話から6話まで、作品内時間ではなんと1日しかたっておりません！　信じらんない！　ですが次回よりようやく、ハンターさんの本格的な異世界狩猟生活が始まる予定です。日数もがんがん跳びます。あしからず。

キャラが増えてきました。うはｗｗｗｗ会話書くの楽しいｗｗｗｗ修正されないでｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ
そろそろ登場人物表でも作ったほうがいいのかなー。

感想、意見、どしどしください。ネタはそれ以上に欲しいです！

第7話　新たなる脅威（前書き）

7話をシュート！

おかげさまでユニーク１０００突破いたしました。読者の皆様、これからもどうか応援よろしくお願いします！

俺これを投稿したら寝るんだ…

第7話　新たなる脅威

あのガルム砂漠からの奇跡的な生還から、はや一週間がたとうとしている。

帝国軍に保護された俺はアーネストの厚意もあって、その間にこの世界についての知識をひたすらに追い求めていた。

まず、この世界は大きな大陸が1つと、その周りに海を隔てて中小の島が浮かぶ、という構成となっている。そして、帝国は大陸の西半分を領土として所有しており、世界でもっとも巨大な国家として君臨していた。東半分は2つに分かれて統治されており、それぞれ“王国”と、その8分の1ほどの領土で成り立っている“教国”―なんとかいう教団が設立した国、というか自治都市―である。…つまり、この大陸には3つの国があるわけだ。あと、周りの島にも大小の街や村があるらしいが、たいていは帝国か王国のどちらかに属しているようだ。

どの国も、通行許可証は必要だが、基本的に出入りは自由。国同士の仲は良好らしい。かなり昔に一度、帝国と王国の間で戦争があったらしいが、停戦して以来そのままだとか。

人々の生活は、魔法を有効に活用して営まれている。…うーん、まだ実感できていないのだが、俺の世界の“技術”は、そのほとんどが“魔法技術”に置き換えられていると言ってもいいだろう、とアーネストが教えてくれた。俺もいずれは魔法に慣れなきゃいかんのかなぁ…。

――と、ここまで、今までに得た情報を思い返すと、俺はグゥッ

と背伸びをした。

ここは基地内の俺に与えられた部屋だ。使われていない兵の部屋を貸してもらっている。俺はそこで2時間以上机に向かっていた。時刻は…もう昼をまわった頃か。そういえば昼食をとるのも忘れていた。まったく、こんなに勉強したのは何年ぶりだろう。

机の上には、帝国領の危険区域…モンスターが頻繁に出現する地域の地図が広げられている。狩りを行う際、その場所の地理を把握しておくのは必須のことだ。故に、ちょっと無理を言って方々の地図をかき集めてもらったんだが…

「完全じゃない地図が多すぎるな…」

けっこうな数の地図に、いまだに白い部分が点々と存在していた。おそらく、まだここまでたどり着けていないのだろう。…この世界の人間は、どれだけモンスターに無力なんだ？

そのあたりの実態を後で訊いておこうと脳内のメモに書きとめていると…

コンコン。

と、控えめなノックの音。来客のようだ。いい区切りがついた、と手早く書類を片付けつつ、どうぞ、と声をかける。

「失礼します、ハンター殿」

扉をあけて入ってきたのは俺の女神様、シルヴィアだった。軽く俺のテンションが上がる。が、実はそれほど珍しいことではないの

だ。アーネスト…彼女のお父君が俺になにか連絡をよこすときは、娘であるシルヴィアに言伝を頼むからである。

…そうなんだよ、あのダンディの娘なんだよなぁ、シルヴィアは。彼女のフルネームを聞いたとき、ちょっと心の片隅に引っかかりを覚えてたんだけど、この間アーネストに「娘に何か言ったのか？最近どうも俺を見る目に殺意がある気がするんだが」って問いただされて、やっと気づいた。うーむ、シルヴィアがアーネストを超えるのは構わないんだが、超えたら超えたでなんか大変なことに――

「あの、ハンター殿、大丈夫ですか？」

「…ああ！　悪い悪い。考え事してた。アーネストの用事か？」

「はい。執務室まで来てほしいとの事です」

「あいあい。了解いたしました」

彼女と一緒に部屋を出たところで、シルヴィアが申し訳なさそうに言う。

「申し訳ありません。ハンター殿もご自分のことで大変でしょうに、何度もご足労を…」

「ああ、そんなの、こちらこそだ。今はまだタダでメシ食わせてもらってるようなもんだし」

「…食事の提供だけで貴方ほどの人が雇えるなら、願ってもありませんが」

「んー？　そんなこと言っちゃっていいの？　俺の戦いを見たわけでもないのに。…もしかしたら、強いって嘘をついてるのかも知れないよ？」

「…私に教えてくださったのは、全て嘘だったのですか？」

急に変わった雰囲気に気づいて彼女を見ると、シルヴィアは不安げな顔で俺の顔を見上げていた。

「おわっ！？　…だ、大丈夫、嘘じゃないから。うん。嘘じゃないよ。信じて？」

あわてて訂正すると、彼女はみるみる笑顔になって歩き出した。

…あーもー可愛いなチクショウ！

――願わくば、シルヴィアがいつまでも純粋な女性であらんことを。

……

……

…

執務室の中には、アーネスト一人だけだった。いつもならそばに控えているはずのボルトのオッサンは見当たらない。訓練でもして

るのかね？

「ああ、急に呼び出してすまないな、ハンター君」

「いつものことだろうが。…で、なんか用か？」

「少し待ってくれ。ボルト大尉がいま必要なものを取りにいっているからな」

必要なもの？　どうやらいつもの情報交換会とは少し違うようだ。

「では中佐、私はこれで失礼いたします」

「おっと中尉、悪いがまだ残っていてくれ。今回は君にも関係のある話だからな」

退出しようとしたシルヴィアを呼び止めるアーネスト。…彼女にも関係のある話ってなんだろう？

――ところでこの親子だが、普段はお互いに他人のように話している。どうやらそれらしく会話をするのはプライベートの時だけのようだ。ちょっと薄情な気がしないでもないが、これが公私混同を避ける、ってことなんだろう。仲が悪いわけじゃないようだしな。

「ふむ、ところでハンター君。軍服が実によく似合っているな。まるで本物の帝国軍人のようだ」

「ええ、私もそう思います」

「あー…、ありがと」

やめろよー、照れるだろー？　…普段着を持っていなかった俺は、初日に借りた帝国軍の軍服をとりあえず着て歩いている。階級章とかいうものは外しているのだが、たまに新人らしき兵士が敬礼してきたりする。…俺も調子に乗って敬礼を返してやったりしてるけどな。

――コンコン、ガチャ。

「中佐、お待たせいたしました」

「失礼いたします。バーナード・ウィリア少尉、お呼びということでまいりました」

ノックに続けて入ってきたのは、ボルトのオッサンと…なぜかバーナード君だった。

「ご苦労、大尉、少尉。…さて、そろそろ始めるとしようか」

ボルトから何か資料のようなものを受け取りつつ、アーネストが口を開いた。

「単刀直入に言おう。…君たち3名には、魔獣“トライホーン”の討伐に向かってもらいたい」

＊　＊　＊

「トライホーン？」

新たに耳にしたモンスター…いや魔獣の名前に、俺は聞き返す。だが、どうやら他の2人は聞き覚えがあるようだった。

「ト、トライホーン…あの“駆ける雷（いかずち）”を、ですか！？」

「父…中佐！　いくらハンター殿といえ、それはあまりにも無茶かと…！」

それぞれバーナード君とシルヴィアの悲鳴にも聞こえる声が執務室に響く。それをアーネストは黙って目を閉じて聞いていた。

「その、トライホーンってのは、どんなやつなんだ？」

「ふむ。大尉、資料を彼らに」

ボルトのオッサンが近寄ってきて、俺と、隣でまだ険しい顔をしている2人に紙束を手渡す。目を落とすと、表紙には『ベルクト近隣での魔獣による被害の調査報告』とあった。

「ハンター君には説明しておこう。ベルクトとはこの基地から飛竜で3時間ほどの場所にある、帝国に属する小さな町のひとつだ。近郊には帝国でも有数の大きな森林が広がっており、町は主にそこで営まれる林業によって収入を得ている」

アーネストの説明を耳に入れつつ、俺はペラペラと資料をめくっていく。図や表なんかがたくさん書かれている。これらはたぶん被害による収入の増減を表しているんだろうが――

「…つい先日、その森に件の魔獣が姿を現した。おかげで森林には立ち入り禁止のお触れが出され、ベルクトの町の収入は激減すると予測されている。――一刻も早い解決が望まれている」

俺はページをめくる手を止めた。そこに描かれていたのは、特徴的な3本の角を持つ魔獣（モンスター）。

「…魔獣トライホーン。全長はおよそ15～20m。見ての通り、頭の3本の角を特徴とする魔獣だ。故にトライホーン（三本角）と呼ばれているのだが…」

俺は資料の絵（写真）を、ハンターの目で観察していく。…太い4本の脚を持っている。体が20m近くあるってことは、狙うなら足か？…身体の形状がどこと無くファンゴを連想させる。もし突進攻撃を得意とするならば、ブロス系と同じような戦法もとれるか？　…目はあるようだ。数に限りはあるが、閃光玉が有効かもしれない。…脚に負けず尻尾も太いな。叩きつけられたら痛そうだ。

俺の目は次々と敵の情報を得ていく。その間もアーネストは説明を続けている。

「奴の最大の武器はその角から発生する電撃だ。魔法のようなものと推測されているが、詳しくは分かっていない。…なにしろ、今までに討伐が成功した例が無いからな。解剖もできていないんだ」

「…何だって？」

思わず観察を中断し、アーネストの顔を見つめてしまう。では、どうやって対処してきたのだろうか。

「あの種は群れを成さず、また姿が確認されることも数十年に一度と少ない。帝国軍では今まで、出現した“雷”を大規模な転移魔法によって別の被害の少ない場所へと移動させるという手段をとっていた」

「なんとねえ…問題の先送りもいいところだな」

うむ、とうなずくアーネスト。

「だが、その転移魔法は膨大な時間をかけて準備しなければならない。また、過去にはトライホーンのあまりの大きさに上手く転移させることができず、転送先の座標が大きくずれて、人のいる場所に移動させてしまったケースもある」

「それは…なんとも」

「もう二度とあってはならない。絶対に忌避しなければならん事なのだ」

と、いままで黙っていたボルトが言った。彼の目に、深い悲しみの色が見える。…どうも、その過去とやらにかかわってたらしいな。

「…そこでだ」

これはアーネスト。視線を向けると…なんともまあいやらしいニヤリ顔をしていらっしゃる。

「グランドワームを一人で殲滅する力を持つ“はずの”君に、この天災とも言える魔獣に挑んでもらいたい。無論、成功した暁には、

帝国から君へ何らかの褒賞があるだろう」

「…はぁん」

つまり、俺を試そうって事らしい。あの“芋虫”を倒したことが嘘じゃないと、証明しろってことか。奇しくも、ここに来る前のシルヴィアとの会話と重なる。

「中佐！　あれはこの第1竜騎士部隊の総力を持ってしても、勝てる可能性は極めて低いと言わざるを得ないほどの魔獣です！　それを3人でなど――」

「…中尉、今の発言はその隊長である私への、ひいては帝国軍そのものへの侮辱、ともとれる内容だが…わかっているのか？」

これまで沈黙していたシルヴィアの激昂した言葉に、冷ややかな応答をするアーネスト。…おいおい、親子でいがみ合うのはよしてくれよ？

「じ、自分からも質問してよろしいでしょうか？」

「…かまわんよ、少尉。話してみたまえ」

おっと、バーナード君がここで動き出した。なかなか空気を呼んだ行動だ、と心の中で拍手する。

「…先ほど、中佐は“ハンターさんに”トライホーンに挑んでほしいと言われました。まるで、自分たち竜騎士は戦わなくてもよい、とも聞こえる言葉だったのですが」

…言われてみれば、そういっていた気がする。改めてアーネストを見てみると、一瞬驚いたような顔をしたが、やがていつもの顔に戻っていった。…いや、ちょっと冷めた目をしてるな。

「そのとおりだよ。…シルヴィア中尉、バーナード少尉。君たちは戦闘には積極的に参加せず、彼のサポートに徹してもらう」

「…理由を、訊いてもよろしいですか、中佐」

あーあー、シルヴィアがもう震えてるよ。そりゃ、見てるだけでいろなんて彼女に言ったら、怒るに決まってるよなぁ。プライド高い子だし。

「…おそらく、足手まといになるだろうからだ。…いや、君たちだけではない。おそらく俺も、ボルト大尉も、彼とは並んで戦うことはできないだろう」

俺以外の顔が苦いものに変わる。アーネスト自身も含めてだ。

「それは、技術面の差のことも無論あるが、それだけではない。…彼と我々竜騎士では、その戦い方がまったく異なるという点もある。おそらく、君たちが介入すれば、彼の任務遂行能力が下がってしまうだろう。ふがいないと思うが、ここは…」

「おい、ちょっと待て。そこは俺の話も聞いてから判断するべきところだろ」

――好き勝手いいやがって。皆の顔が俺のほうを向いているが、俺はアーネストだけを見据えて話す。

「前に説明した通り、俺たちハンターはさまざまな武器を使って戦う。どんなタイプのモンスターにも対処するためだ。そして、異なる種類の武器を使うハンターがグループを組んで狩りに行けば、成功率はグッと上がるんだ。――しかも、俺は今回、初めて出会うモンスターに挑もうとしてるんだぞ？　わざわざ成功率を下げるようなことするか！」

「…い、いやしかし、技術や戦い方の違いは無視でき――」

「バカヤロー！　技術に差のあるハンターがパーティ組むなんて普通のことだし、戦い方はそれこそ武器によって違うんだ。自分の戦闘スタイルを仲間によって変えるなんてのは当たり前のことなんだよ！」

「う…うむ」

完全に沈黙してしまったアーネスト。…あーすっきりした。

「この仕事（いらい）、出発はいつだ？」

「明後日の夕刻にこの基地を出発。ベルクト到着後、現地に駐屯している兵士の話を聞きつつ、一泊。翌日、森林地帯に進入、作戦開始だ」

明後日か…あんまり時間無いな。急いで作戦練らないと…

「よし、時間無いからさっさと準備始めるぞ！　シルヴィア！　バーナード！　…昼メシ食った？」

「はっ！？…いえ、まだです」

「僕も、まだ食べてないな」

「よーし、じゃ食堂で作戦会議な！　竜騎士の戦い方とか、訊きたいことたくさんあるから覚悟しとけよ？」

「…はっ、お供させていただきます、ハンター殿！」

「うん、任せてください、ハンターさん！」

アーネストとボルトを残し、シルヴィアとバーナード君を引き連れ執務室を後にする。…トライホーンか、わくわくするね。

「――ああ、そうか」

小さな声でつぶやいた。――あの時、俺がこの世界の地図を見て笑った理由、それは…

――自分だけが、この未知の世界のモンスターと戦(や)りあえる、って思ったからかもな。

第7話　新たなる脅威（後書き）

次回から、トライホーンとの戦闘が始まります！　たぶん！！
1話だけで終わるのか、2話ぐらい続くのかは分かりませんが、期待してくれれば嬉しいです。できるだけ濃密な戦闘描写をめざします。

トライホーンのイメージは、ゾイド「マッドサンダー」。つまり、トリケラトプスですね。異名の“駆ける雷”は、サンダーから連想しました。…安直ですね。

感想でいただいた甲虫系のモンスターの案、どこかで絶対使いますからー！
感想、意見、ネタ、引き続きお待ちしてます！

第8話　騎士たちの実情（前書き）

８話目～。仕事の都合で間が空きました。その間に総合ポイントが１００超になってました。ありがとう！　愛してる！！

今回は短めの４０００文字程度。誠に申し訳ありませんが戦闘はなし。ゴメンね！

第8話　騎士たちの実情

―Ｓｉｄｅ　アーネスト―

「完全に言い負かされてしまいましたな、中佐殿？」

彼らが執務室をでていったあとで、俺の傍らに立つボルトがからかうように言う。

「…いや、まったく彼の言うとおりだったな。俺もそろそろ引退か…」

「わはははは。何を言われますか中佐。あなたが居なくなったら、誰が竜騎士部隊を指揮するんです？　…当然ですが、私は辞退させていただきますぞ」

「ふっ、案外あのハンター君に任せてしまえば、全て上手くいくかも知れんぞ？」

「ですが、それはあくまで魔獣との戦闘に限られるでしょう。…やはり、もう少し中佐には頑張っていただかねばなりませんな」

「分かっているよ。飛竜にまたがることができる間は、空を飛び続けたいものだ」

同感です。とボルトが続け、少しの静寂。…俺は、机の上に置か

れた書類に目をやる。

「しかし、トライホーンか。彼が現れた後で確認されたのは、僥倖といえばいいのか…」

「…私は、幸運だと思っております。もしあの男が討伐に成功した場合、その死骸を解剖して弱点を突き止められましょう。それさえ分かってしまえば、帝国軍だけでもあれを倒すことができる。――二度とあのような事故を起こすような作戦はとられないでしょう」

ボルトは、あの事故で大きなものを失った。…何かあったことはハンター君も気づいているだろう。

「彼は、お前からトライホーンの情報を引き出そうとするだろう。…その時は、協力してやってくれ」

「無論です。あの化け物を倒せるのなら、なんだってしてやりますよ」

そう、帝国の民のためにも、この男のためにも、ぜひとも成功させてもらいたい。彼はこの作戦をテストだとしか思っていないだろうが――

「君への期待は、思っている以上に大きいものなんだぞ、ハンター君？」

―Ｓｉｄｅ　アーネスト　Ｅｎｄ―

＊　　＊　　＊

「もぐもぐんぐんぐ…じゃ、早速だけど竜騎士の対モンスター戦での戦い方を知りたいんだが」

「……」

「ん、どうした、２人とも？」

基地内の食堂に移動した俺たち３人は、やや遅めの昼食をとりつつ、作戦会議をしていた。ちなみに俺の目の前にあるのは、この食堂で俺が注文する“いつもの”―すーぱー特盛１０人前ＳＰ―定食だ。…どうも、それを見てシルヴィアとバーナード君は絶句しているようなのだが…

「あのさ、そんなメニュー、この食堂にあったっけ？」

意を決したように、バーナード君が質問してきた。

「いや、無かった。だから、直接料理長にかけあって、作ってもらった」

まあ、タダ飯喰らいの分際で、って思われるかもしれないが、それはそれ。俺は食に関しては極力妥協しないことにしているのだ。…料理長は、それで精一杯です、って泣きそうな顔してたけどな。

「…どこまでも非常識だよね、君」

「ほら、そんなことどうでもいいだろ。時間がないんだ、早いとこ始めよう」

話を強引に終わらせて、シルヴィアに説明を促す。

「…えー、わが帝国軍竜騎士の戦い方は、飛竜のスピードを生かした高起動戦法、一撃離脱を基本としております。今回のような地上の目標に対しては、高高度から急降下し、竜騎士専用の兵装である“竜騎槍”での一撃を与え、再び急上昇。この一連の流れを多数の竜騎士が行って、ダメージを蓄積させて倒します」

「竜騎槍…ゲイボルグか？」

「は？」

「いや、なんでもない。こっちの話。…その竜騎槍ってのは、どのぐらいのリーチを持ってるんだ？」

槍だから剣よりは長いと思うんだが…

「そうですね…最大で２０ｍほどかと」

「何ぃ！？」

おいおい、どんだけ長い槍なんだよ！　そんなものがあれば、それこそ反撃されない距離から延々と攻撃しつづければいいじゃないか。

「あー、たぶん君が想像している槍とは別物だと思うよ？」

ここでバーナード君からの補足が。…俺の思っているものと違う？

「…どういうこと？」

「竜騎槍は魔法兵装の一つなんだよ。先端部から圧縮された魔力を放出して、それを相手に突き刺してダメージを与える。使用者が魔力を込めれば込めるほど威力が増すんだ」

ふーん…ガンランスみたいなものか。

「たいした武器だな。２０ｍも離れた位置から魔法で攻撃できるんだろ？」

だが、そこでバーナード君は首を横に振る。

「最大射程は２０ｍってだけ。そこに届くまでに威力のほとんどが減衰してしまうんだ。鎧を装備した人間に攻撃を貫通させるなら１０ｍが限界。この前のグランドワームの表皮を貫こうとするなら５ｍまでだ」

なるほど…どっちかっていうとボウガンだな。それも近距離で撃たなきゃ通らない欠陥品だ。…本当、この世界の対モンスター技術は俺の世界に比べて遥かに低い。

「今回の獲物…トライホーンにダメージを与えるには、どれほどに接近する必要がある？」

少々お待ちを、とシルヴィアが資料を確認している。…やがて、

目的のデータにたどり着いたようだが、その表情を見るにいい結果ではなさそうだ。

「過去の戦闘におけるデータによりますと…１ｍ以内。ほぼ零距離に近い位置で無いと、かの魔獣の表皮貫通にはいたらないようです」

思わず呼吸が止まってしまった。それじゃあ、彼らの武器では文字通り歯が立たないではないか。

「…一応訊いておくけど、他の武器は？」

「近接戦闘用の片手剣がありますが…魔獣相手には役に立たないかと」

「補助兵装的なものはあるか？」

「僕たちに支給されているのは小威力の炎、風、電撃魔法がそれぞれ込められた魔法石が２つずつと、緊急脱出用の転送魔法石が一つ。あとは…通信魔法石１つってところかな」

「その…小威力ってのはどの程度のものなんだ」

「２ｍぐらいのサイズの魔獣に使ったことがあったな…ダメージはあたえられるけど、致命傷には至っていなかったと思う」

「我々は、これらの魔法石はサバイバル用だと教えられました。火をおこしたり、高所にいる鳥を打ち落としたりなどです」

うーむ…。ますます俺は唸ってしまう。つまり、竜騎士の武器とは竜騎槍１本だけということだ。なんというか――

「お前ら、よくそれでこれまでモンスターと戦って生き延びてこられたな。本当は俺より強いんじゃないかぁ？」

「…これでも、マシになったほうなのです。先代の隊長…私の祖父に当たる方だったのですが、その方が竜騎士の対魔獣戦法を発案されるまで、魔獣の相手といえば陸戦兵のみでしたから。…勿論、飛竜の相手は当時から竜騎士の役目ですが、凶暴な飛竜からは逃げる、というのが基本でしたし…」

俺の皮肉に、シルヴィアは苦い顔で応えた。…ごめん、いじめたいわけじゃないんだ。

「まあ、あとで竜騎槍の実物を見せてくれ。戦い方はそれから考えよう。…最後に、怪我の治療なんかの方法を聞きたいんだけど…」

実は、俺が一番聞きたかったのはこれである。砂漠での一件で、持っていた回復薬などの治療アイテムはほとんどを水分補給に使ってしまっていたからだ。

「自然治癒力を活性化させる魔法がこめられた魔法石を携帯することになっています。それである程度の傷は治せるのですが、目に見えて大きいとわかるような傷は、魔法兵でなければ治療するのは難しいです」

「ん？　魔法兵…」

どこかで聞いたことがあるな、と首を傾げるが、シルヴィアはその魔法兵を知らないのだと解釈したのだろう。…実際知らないんだが。簡単に説明してくれた。

「魔法兵はその名の通り、主に魔法で戦闘を行うものたちです。前衛魔法兵と後衛魔法兵にわかれており、前衛は攻撃魔法、後衛は補助、治療魔法を担当します。…帝国軍規で、前衛魔法兵は男性のみと決められています」

最後は、おそらく彼女の感情から出てしまった蛇足だろう。…どうも、この帝国は男性上位社会らしいな。ハンターには男も女も関係なかったもんだが…。

「うーん、今のところはこんなもんか。明日、改めて戦闘時の動きを詰めるとして――」

俺はこのとき、何気なく机の上に目をやっていた。そこで偶然目に留まった、ある調味料のビン。

「まず、バーナード君。君に任務だ。…ボルトのオッサンのところにいって、三本角の情報をもらって来い」

「大尉のところに？」

「ああ、あのオッサン、なんか知ってる素振りをしていたからな。…ただ、あまりいい思い出じゃなさそうだったから、慎重かつ、大胆にいけよ？」

「難しい注文をするねぇ…」

どんなものが出てくるかは分からないが、今はできるだけ多くの情報を手に入れたい。ボルトには悪いが、過去の傷をほじくり返させてもらおう。

あと、もう一つ。

「それと、魔法兵を一人借りてこよう」

「うん、それは確かに必要だと思う。もっとも、治療が必要ないのに越したことは無いけど」

「しかし、ハンター殿、当てはあるのですか？」

「ある。…俺の、この世界での数少ない知り合いの一人だ。ま、駄目だったらアーネストに泣きついてやるさ。…じゃ、バーナード君。仕事が終わったら武器倉庫に来てくれ。竜騎槍とやらの性能を見てみたいからな。――では、解散！」

俺の脳裏には、あの調味料が空をフワフワ飛ぶ映像が映し出されていた。

第8話　騎士たちの実情（後書き）

次回あの子が仲間入り。メインキャラの一人だったんですね～。
ともかく、これで4人。モンハンのパーティ規定数と同じ数になります。

実は、今話もいつもと同じ分量を書きたかったんですが、どうにも上手く筆が進まないのでとりあえずここで切ることに。
書いてる感じからして戦闘シーンは次々回かな？

第９話　賭ける想い（前書き）

えー　大変長らくお待たせいたしましたー　９話でございますー
…いや、ほんとすまんかった。仕事が忙しかったっていうのもあるけど、なにより自分の書きたいことを文にするのに凄く時間かかった。こういうのを難産っていうのかね？
その甲斐あってというか、そのせいというか…最長の９５００文字程度となりました！　ごめんまって帰らないで！
…お茶とお菓子と枕とＢＧＭを用意してお読みください。

第9話　賭ける想い

―Ｓｉｄｅ　アリス―

私はいま、竜騎士のみなさんが使用する武器がしまわれた倉庫の中に居ます。

本来であれば魔法兵の、しかもまだ二等兵の私がおいそれと入れるような場所ではないのですが…

「あの、そろそろ私が連れてこられた理由を聞きたいんですけど…」

「もうすこし待っててくれ。準備ができたら話すからさ」

私の目の前にはいつぞやのお客様…ハンターさんが立ってます。先ほどまではもう一人、名前は知りませんが中尉の階級章をつけた女性がいらしたのですが、ハンターさんと2、3言交わすと、出て行ってしまいました。

――今日もいつものように訓練していたのですが、途中で上官によばれて行ってみるとハンターさんと中尉さんが。「おう、久しぶり。ちょっと来てくれ」と連れ去られ、今も何がなんだか分からないままです。

私、なにかしたんでしょうか。覚えはないんですけど。…それとも。

その考えを、ぶんぶんと頭を振って追い出します。それはないはず、あのことは誰にも話していないし、他にもいろいろ手は打ってるし――

「あー、アリスさん」

「ひゃ、ひゃい！？」

「その、取って食う気はないから、そんな不安そうな顔しないでくれよ。ちゃんと説明するから」

「あ、あう。すみません…」

顔に出てしまっていたようです。うぅ…気をつけないと墓穴を掘ってしまうかもしれません。

＊　＊　＊

「――やあ、ただいま」

「おっ、ようやくお出ましかバーナード君。待ちわびたぞ」

あれから数刻、ハンターさんや戻ってきた中尉さん―シルヴィア中尉だそうです―と自己紹介し合いながら待機していると、出入り口付近から声が。男性のようです。

「戻ってくる途中で中佐に呼ばれてね。…はいこれ。軍からの正式な協力要請書だって。報酬についてとかいろいろ書いてあるから、目を通しておくように、だそうだよ」

ハンターさんのところにやってきて、なにやら書類を渡しています。少尉の階級章をつけてるけど、歳は私とあまり変わらないように見えます。そういえばシルヴィア中尉も若そうだなぁ。

「わかった。で、オッサンの方は？」

「それが…」

少尉さんが取り出したのは…手帳、かな？　ハンターさんはそれを無言で受け取りました。手帳は小さめのものですが表紙はぼろぼろで、よく使い込まれているのがわかります。

「とりあえず、これで役者はそろったな。…おっと、アリスさん。こいつはバーナード君。竜騎士隊の一人で階級は――えっと…」

「少尉だよ。…よろしくアリスさん。バーナード・ウィリア少尉です。大変だろうけど一緒にがんばろう」

と、少尉さんが歩み寄ってきて手を差し出してきました。私も手を出して、彼の手を握ります。…優しそうな外見とは裏腹に、けっこうごつごつとした手でした。

「あ、はい。アリス・ウェンライト二等兵です。後衛魔法兵です。こちらこそ――あれ？」

「ん？　どうしたの？」

「…あの、大変だろうけどって、一体何が…？」

なんだろう、ものすごくいやな予感がしてきました。おそるおそるバーナード少尉に訊いてみると…

「えっと、今回の任務はトライホーンの討伐なんだけど…あれ、まだ聞いてなかったの？」

トライホーンの討伐？　トライホーン、とらいほーん……“駆ける雷”！？

「ええええええええええええっ！？」

――拝啓、お師匠様。軍に入ってまだ半年ですが、私はとんでもないことに巻き込まれているようです。

―Ｓｉｄｅ　アリス　Ｅｎｄ―

＊　＊　＊

「では、これより竜騎槍の試射を行います」

「ああ、よろしく頼む」

ところ変わって、ここは屋外の訓練場だ。竜騎士であるシルヴィアとバーナードが竜騎槍を構え、今まさに撃たんとしているところである。俺はそれを少し離れたところから見ている。そして、隣に並んでいるのはアリスさんだ。

最初は驚いていたアリスさんだが、後方での支援をしてくれるだけでいいからなどと説得し、止めとしてシルヴィアに言ってとってきてもらったアーネスト直書の命令書を渡すと、涙ながらに了承してくれた。

だが、彼女を選んだのはどうやら正解だったようだ。ちらっと横のアリスさんに目をやる。巻き込んだようなものだから、と最悪ベルクトの街で待機してもらうことを提案したのだが、「私も軍人ですから」と却下した。見た目は虫も殺せないような女性だが、なかなかの胆力を持っている。

ついでといっては何だが、俺のことも話しておいた。一時的とはいえ仲間になるわけだし。信頼関係は築いておかないとな。…もっとも、ちょっと半信半疑な目をしてたけど。

「あっ！」

「ん…おお？」

アリスさんの上げた声に反応して、フィールドのほうに視線を戻す。と、そこにはいつのまにか大小さまざまの丸い球体がいくつか浮かんでいた。見たことのある光を放っている。魔力光だ。見た目はまるで大雷光虫のようなそれに少し感傷を抱いたその時――

ビシュゥゥッ！！

「うおおっ！？」

その球体はいきなり現れた光の帯に貫かれ、消失した。と、思いきやすぐさま別の場所に現れる。が、それもまた光に消し飛ばされた。…ああ、そうか、これはマトなのか。

そう理解してから改めてフィールド内のシルヴィアとバーナードを見ると、やはりあの竜騎槍の先端を光球に向けていた。そして、それから発射される光の槍。

「これにもっと威力があれば申し分ないんだろうけどな」

そこが一番のネックだろう。攻撃対象に届くまでの時間はボウガンや弓より圧倒的に早いんだが…。

しばらくそうやって観察を続けていると、

「ハンターさん」

「…んあ？」

ふいにアリスさんが話しかけてきた。

「ウィリア少尉、すごいですね。はじまってからまだ一度も外してませんよ」

「え、本当？」

言われて改めてバーナード君を中心に訓練の様子を見てみると、シルヴィアが１０ある目標のうちの２，３を外しているのに対し、彼はすべての攻撃を確実に命中させている。おまけに球体のほぼ中心を正確に射抜いていた。世が世…あ、いや、世界が世界ならいいガンナーになれるだろうな。

それと一応言っておくが、シルヴィアの腕も悪いわけではない。彼女は目標の中でも特に小さいものを逃しているだけだ。…決してひいきしてる訳じゃないよ？

と、そうこうしているうちに残っていたマトがいっせいに消えた。

「ハンター殿、第一プログラムが終了しました。続いて第二…飛竜に騎乗しての攻撃訓練に移行します」

「おう、任せた」

シルヴィアの声にそう返してやる。彼女はうなずくと、口に指を当て、ひゅっとひと吹き。ちょっと遅れてバーナードも指笛を響かせた。すると…

ゴオオォッ！！

大気を切り裂くような轟音を響かせて、空から２頭の飛竜が舞い降りた。どちらにも見覚えがある。確か、シルヴィアのアドルとバーナードのフリッツだったかな？　今、それぞれの愛竜の頭をなでている竜騎士２人と以前交わした会話を思い浮かべて、記憶から名前を引っ張り出した。

「私、こんなに近くで飛竜を見たの初めてです！」

アリスさんはちょっとはしゃいでいる。俺も初めて飛竜と相対したときは興奮したっけな。…無論、自分の命がかかっているからだったけど。

――しかし、まさかハンターである俺が“飛竜と一緒に”狩りに行くなんてことがあるとはね。

「仲間となれば、頼もしいことこの上ない、な」

今までは敵でしかなかった新しい“仲間”を見つめながら、そうつぶやいてみる俺だった。

……

……

…

「二人ともお疲れさん」

「お疲れ様でした！　とっても格好良かったです！」

「いえ、普段の訓練ではこの内容を何度も反復するので、このくらいなら」

「最初の頃はそりゃあ大変だったけどね。もう慣れたよ」

飛竜とともに空から降りてきた二人にねぎらいの言葉をかける。

一息入れよう、と訓練場内の休憩室に移動した。おのおの適当な場所に腰掛けたところで、作戦会議その2を開催する。

…いま彼らも言っていたことだが、竜騎士たちの練度は実際のところ十分なのだ。例の急降下しての攻撃も見せてもらったが、完全に飛竜と一体化した動きで、ブレることもない。特にバーナードは凄い。飛竜に乗った状態でも、地上となんら変わらずに標的を定めて正確に射抜いていた。となると、足りないのは――

「やっぱり武器の性能がいまひとつなんだよなぁ」

「我々は今まで特に文句はありませんでしたが…」

シルヴィアが言う。…実際、問題はなかったんだろう。『人間』相手ならな。俺はあまり考えたくないけど。

「モンスターと戦うには絶対的に火力が足りない。…逆に、ここさえ補うことができればどうにでもなると思うんだが」

「それは魔法での攻撃では駄目なんですか？」

と、魔法エキスパートのアリスさん。

「うーん、俺はこの世界の魔法の威力ってのをまだ知らないからなんとも言えないけど、駄目だったからトライホーンはどこかに飛ばす、っていう対処をしてたんじゃないのか？」

そう指摘してやると、あう、と黙り込んでしまった。…やばいかわいい。

――なんとなく皆黙り込んでしまったのだが、そこで

「…ところで、僕が借りてきた手帳は？」

バーナード君が場の空気をかえてくれた。…正直、すっかり忘れてた。懐からその手帳――手のひらよりちょっと大きいぐらいのサイズ、割と厚くてボロボロ――を取り出した。

さっそくそれを開いてみることに。

「これは…ええと？　『大陸における魔獣の生態』…研究書みたいだな…おっと、著者『Ｍ・ボーマン』？」

俺がそこに書かれた名前を口に出した瞬間、まわりの温度がスッと下がったような気がした。まあ、この著者の苗字からして、何かあるとは思ったんだがな。

「知ってるのか？　このＭ・ボーマンって人」

３人に問いかける。…十中八九、いい話が出てくることはないだろうけど。

しばらく沈黙が続いたが、やがて観念したかのようにシルヴィアが口を開いた。

「Ｍ・ボーマン…マリア・ボーマン女史は、帝国きっての生態学者でした。…その、１５年前ほど前に亡くなられています」

「…で、ボルトのオッサン――ボーマン大尉との関係は？」

「…奥様です」

「そうか。――なら、この本はマリアさんの遺品の一つって事なんだな」

ふう、と一息ついてから、俺は本をめくりはじめた。そこには、数多くの種類のモンスターたちの所在地やその習性が、美しい写生絵とともに記されていた。ゆっくりとページをたどる。

『向こう』でもたくさんの生態書に触れてきた俺だが、これほど詳細に書かれているものはそうそうお目にかかったことがない。モンスターごとの危険度や、万が一出会った場合の対処法なんかも載っている。マリアさんがどれだけこの本に精魂込めていたのかがよくわかるというものだ。

…ふと、俺の手が止まる。そこに描かれていたものは、３本の角を持つ獣。トライホーンだ。危険度は最高クラス、５段階中の５に設定されている。そして、その生態も詳しく書かれていた。…確かにこれは役立ちそうだ、と次のページをめくり――

俺は、本を閉じた。

「あの、ハンターさん？」

アリスさんが心配そうな顔をしている。他の二人も同じような顔だった。

「…いや、なんでもない。大丈夫だ。

――よし、とりあえず今日はここで解散。作戦は出発までに俺が

考えておく。なにか聞きたいことができたら呼ぶけど、行動は自由にしてくれ。だけど、疲れを残したり、怪我なんてするのはもってのほかだ。わかってるな？」

おのおのを見回すと、力強くうなずいてくれていた。…まあ、皆優秀だから大丈夫だろう。もっとも、アリスさんはまだ測りかねてるけどな。

…そんな中で俺は、目をそっと手の中の研究書に向けた。あのボルト大尉がどんな思いでこれを俺に託したのかを考えながら。

……

……

…

翌日の俺はというと、文字通り一日中ずっと資料室に缶詰になっていた。当然、対トライホーンでの作戦を考えるためだ。他のメンバーにもいろいろと訊ねたのだが、その中でも有用なものだと思うことをいくつかあげてみる。

まず、シルヴィアの愛竜、アドル君のことだ。こいつは『フォレスター』という割と珍しい飛竜だそうで、その最大の特徴が、多数の木が密集しているジャングルに生息するというものだ。

故に、彼は木々の間を縫って飛ぶことができるという。今回のフ

ィールドであるベルクトの森の地図を見せてみると、この程度の森ならば余裕で飛べるということだ。…正直、敵じゃなくてホッとした。密林の中で機動力維持できる飛竜なんてありかよ…。
「私自身の力ではないのが不甲斐ない」とシルヴィアは悔しそうにしていたが、それを乗りこなせるのはシルヴィアさんの力だろ、とフォローしておいた。どうにか笑ってもらうことができた。まぶしい。

次にバーナード君だが、竜騎槍の性能試験で見せてくれた狙撃能力について質問してみた。恥ずかしそうにしながらも、竜騎槍の射程内なら、たとえ自分か相手、もしくはその両方が動いている状態でもある程度正確に撃てる、と言ってくれた。…今回の作戦の鍵を握るのは彼かもしれない。
ちなみに、彼の飛竜フリッツ君は、他と比べておとなしい種類だそうで、その分攻撃力機動力ともにそこそこ。「気性の荒いやつには乗れなかったんだ」と苦笑していた。

で、最後にアリスさん。魔法についてはまったく分からなかったので、とりあえず使える魔法をすべて教えてもらった。
生活にしか使えなさそうなものや、なんのためにあるのか分からないものなどもあったが、とりわけ俺の関心を引いたのが、『消音』と『隠蔽』の魔法の二つだ。
『消音』はその名の通り、魔法をかけられた対象が出す音を一定時間抑えるというもの。それはせいぜい数分だが、使う価値は大いにあるといえる。そして『隠蔽』は、対象の姿を一定時間見えなくする。…はじめは何の冗談かと思ったが、専門的な説明をされてもさっぱりだったので、魔法なんだから仕方がない、と割り切った。これは強すぎるのではないか、と思ったのだが、その効果時間はわずか1分ほど。これがネックになってメジャーにはならなかったそうな。

「『隠蔽』は制御が大変なので、本当は習得するのが難しいんですよ」と胸をはって説明してくれたアリスさんだったが、何故か途中で焦った顔になり、黙ってしまった。…なんだったのだろうか。

＊　　＊　　＊

そんなこんなでなんとかまとまった作戦を、何度も何度も見直してから資料室を出ると、すっかりと日は沈み、空には多数の星が瞬いていた。この時間になってしまってはもう食堂は開いていないだろう。凝り固まった肩をたたきつつ部屋に戻る。

と、自室の机の上には小さなお皿が。上にはサンドイッチがいくつか乗っていた。一体誰が？

ふと、傍らにメモが置かれているのに気づいた。

『夕食に間に合われなかったようなので、簡単ですが用意しておきました。貴方のほうもお体に気をつけて。　　シルヴィア』

そういえば今日一日、なにも食ってなかったっけな。思わず苦笑いしてしまう。疲れを残すな、なんて言っておきながら、自分がこれじゃあ、世話ないよな。

「…女神様のくれたサンドイッチ、ってか。“激運”がつきそうだな」

俺はサンドイッチと、部屋においてある“飛竜刀―椿―”、そして例の研究書を携え、再び部屋を出た。向かうのは基地の屋上だ。この世界に来てから、俺はそこで毎日愛刀の手入れを行なっている。

この基地は砂漠の近くにあるので、夜は寒いのかと思っていたが、聞いた話によれば魔法である程度の保温を行なっているんだとか。どれだけ万能なんだ魔法。…ともかく、それを聞いてから俺は星空の下で日課をこなすようになった。おあつらえ向きに、屋上にはテーブルと椅子が備え付けられている。

「…うん、美味い」

椅子に腰掛けて、女神サンドをほおばる。空腹も手伝っているのだろうが、とても美味い。貴族はメシが作れない、なんて話があったが、あれは迷信なんじゃないか。『狩りに生きる』にも、どこかのマダムが料理について語っていたコラムが載っていた気がするし。

“椿”を鞘から抜く。刀身が月明かりに照らされて、とても美しい。それを眺めながら、ゆっくりと砥石で研いでいく。武器には愛情をもって接しろ、といったのは、師匠（ジジィ）だったか。

「――綺麗な剣だな」

「まあな。手に入れるのにも苦労した。…椅子、空いてるぞ」

振り向いて、背後の人間――ボルトのオッサンに着席を促す。悪

いが、こちとらハンターだ。気配を消しても“匂い”で分かる。もっとも、向こうも気づかれていたことは分かっていたんだろう、表情を変えずに俺のすすめに従った。

「…作戦は、出来上がったのか」

「ああ。おそらく、あれで何とかなる。無論、情報だけで作られてるから、その通りに行くとは限らないが」

「そうか…。ハンターってのは、凄いんだな。おそらく、軍の中でも“駆ける雷”に勝てるなんて豪語できる奴はいないだろう」

「おいおい、褒めるのは勝ってからにしてくれないか。当日になったら、尻尾巻いて逃げる大法螺吹きかもしれないぞ…っと」

俺は“椿”を鞘に戻した。…本題に入るのに、手入れをしながらでは失礼だろうし、な。

「――あんたから借りたこの本、作戦立てるのに一番役立った。ありがとよ」

机の上に、あの本を置く。彼は、何も言わずにその表紙を見つめたままだ。

「…これを書いたの、奥さんなんだってな。亡くなったそうだが、帝国一の生態学者だったってのも頷けるくらい、いい内容の本だった。トライホーンの生態についても詳しくて、大いに助かった。

――だが、一つ気になったところがある」

いまだ表情を崩さず、無言のままのボルトを前に、研究書のペー

ジをぱらぱらとすすめ、件のトライホーンのページへ。そして、そこからさらに一枚めくった。そこには――

「何もかかれていない。ここから先は、全部白紙だった」

一枚一枚、白紙のページをめくっていく。彼は、いまだ無表情を装っている。…だが俺は、ボルトの手が震えているのに気がついていた。――ここまでしなくてもいいんだろうが、それでも俺は聞いておきたかったのだ。彼の“想い”を。

「今日、資料室でついでに調べた。トライホーンが前回現れたのは15年前。あんたの奥さんが亡くなったのも15年前。…そして、例の転移事故。あれが起きたのは前回の出現時だったらしいな。――一応訊いておく。奥さん、なんで亡くなった？」

そのとき、ふっと彼の顔から力が抜けたような気がした。手の震えも止まっている。

「…マリアは、幼なじみでな。小さいころから一緒だった。お互い、両親を魔獣に殺されたクチだったから、馬も合った。だが、俺とは決定的に違うところがあった」

俺は黙って先を促す。

「俺は、魔獣に対して復讐心をずっと抱いていた。だから軍にも入った。だが、あいつは…復讐より、自分のような人間を増やしたくないと、そう、思っていた。

――軍に入ってから初めて故郷に帰ったとき、あいつは、その本を作り始めたんだ、と笑った」

ボルトは、慈しむような目で本を見ている。

「皆が魔獣のことをよく知れば、被害もきっと減るからと。結婚してからも変わらなかった。時には大怪我して帰ってきたときもあった。その度にな、言うんだよ。魔獣をよく観察してたから死なずにすんだ、ってよ。俺は何も言えなくなったよ。それからは諦めがついて、あいつを信頼して全て任せた。…こいつのときも、そうだった」

ボルトが、トライホーンのページを晒す。

「軍の転移作戦が始まる直前に、マリアはこいつの調査に向かった。あらかた調べ上げて、作戦の前日にはキャンプに引き上げたそうだ。――そして、軍はそのキャンプに“雷”を落としてしまった――！」

彼の手が再び震えだすのを見た。顔を見ると、それは苦しげに歪んでいた。…以前にも何度かこういう顔を見たことがある。大事なものをモンスターに奪われた依頼人は、すべて同じ顔をしていた。

「マリアは、この本を胸に抱えたまま死んでいたそうだ。その一冊の本を護って、命を落とした。…俺が行くのを無理にでも止めていたら？　あるいは、あいつがその本を書くのをやめていたら？考え出したらキリがねぇ！」

「…あんたは、トライホーンに復讐したいのか？」

そう訊くと、ボルトはなにやら複雑な顔になった。俺は、そこでちょっと意外に思った。怒りを露にするものだとばかり思っていたからだ。

「…復讐を考えていないわけじゃねぇ。だが、復讐にも形があると、俺は思う。だから、俺はお前にこの話をするよう、中佐に言った」

「アンタが？」

「ああ。俺はな、場数だけなら中佐の倍は踏んでいる。だから、そいつがどんな強さを持っているのかは見れば分かる。お前があの芋虫どもを一人でやったと聞いたときにも、疑わなかったんだぜ？

…ハンター、お前がトライホーンを倒すことができたのなら、その死骸を解剖して弱点でも何でも探ることができる。次に奴が現れたときには、迅速に対処できるようになるかも知れねぇんだ」

「――それが、大尉殿の復讐か」

「おうよ。そのために、お前を利用する。降って湧いた切り札だ。有効に使わねぇとなぁ？」

ボルトがニヤリと笑った。…俺はというと、なんともまあ暖かい気分になっていた。憂鬱な気分になるのは覚悟していたが、どうやら目の前の男は想像してたより大きい人間だったらしい。

「もうひとつ訊いておきたい。あんたは何でまだ軍に居るんだ？…軍は恨んでいないのか？」

「まあ、当時は恨んだ。それはもう盛大にな。中佐や他の上官に殴りかかったこともあったぜ。八つ当たりしても仕方ないのにな」

「訂正…よくまだ軍に居られたもんだ」

「ははは！　もうムショにぶち込まれても構わないと思ってたん

だ。それを、アーネスト中佐はかばってくれた。いろいろ話も聞いてもらったしよぉ…。だから、中佐に協力するために残ることにした。受けた恩は返せって、マリアも言ってたからな」

話は終わりだ、と立ち上がるボルトのオッサン。

「悪かったな、こんな話をさせて」

「いいってことよ。…頼んだぞ、ハンター。それと、絶対にあいつらを死なせるんじゃねぇぞ」

俺は“椿”を引き抜き、空へと掲げる。

「この剣に賭けて」

それを見たボルトは満足そうにうなずくと、自分の居室へと帰っていった。

――見送った俺は太刀を戻すと、しばらく目を閉じて、今の会話を反芻する。

「よくもまあ、こんな得体の知れない男を信用してくれるよな、どいつもこいつも…」

俺は机の上でくすぶっていたサンドイッチに手を伸ばし、改めてゆっくりと味わった…。

……

……

…

翌日の夕刻、俺たちはアーネストの執務室に集まっていた。出発式ってやつらしい。

アーネストが俺に一枚の紙を手渡す。

「この任務の間、君を“少尉”扱いとするという書類だ。作戦の総指揮官は中尉となるが、無論、現場では君が采配をとってくれて構わない」

まあ、俺みたいな“ぽっと出”をいきなりリーダーにするわけにはいかないんだろう。と、ここでさらにアーネストが小声で俺に言った。

「…娘を頼む」

俺は口では答えず、代わりにポン、とこぶしを彼の胸に当ててやった。アーネストも小さく頷く。

そして、俺の前から離れた。

「――これより諸君らにはベルクトの街近郊の森に出現した“駆ける雷”トライホーンの討伐に向かってもらう。困難な任務ではあるが、諸君らならやり遂げると、私は信じる」

アーネストが俺たち４人の間を通りながらそう述べて、やがて、前に立った。

「抜剣！」

皆が腰の剣を引き抜き、身体の前でまっすぐ立てる。…なお、俺の剣も当然太刀ではなく、事前に渡された儀礼用のものだ。

――しかし、こういうこと初めてやったけど…悪くないじゃないか。

『帝国の誇りに賭けて！』

第９話　賭ける想い（後書き）

だれか俺にもサンドイッチ作ってくだしあ；；；

さすがに今回長すぎだろ…と自分でも思った。けど止められなかった。反省はしているが後悔はしていない。

次回はついに奴との戦いです。…“次回”にするためにこんなに長くなったとも言える。

あ、それとおかげさまで総合ポイント２００越え、お気に入りにいたっては８０越え（９／７現在）となりまして、本当にありがとうございます。ペースは遅いですが完結はさせるようがんばりますので、これからもよろしくお願いします！

感想とネタもお願いします！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9417m/

異世界から来た狩人

2010年10月8日10時58分発行